

長崎県埋蔵文化財調査年報III

[平成 6 年度]

1996

長崎県教育委員会

はじめに

長崎県は日本列島の西端に位置し、中国大陸・朝鮮半島に近いという地理的条件から、旧石器時代～中世・近世の埋蔵文化財が数多く存在しています。

私たちが遠い祖先から受け継いできた貴重な文化遺産である埋蔵文化財を将来にわたって保存するとともに、広く活用を図りながら後世に伝えることは文化財保護行政の責務であります。

近年、開発事業の増加に伴い、埋蔵文化財調査件数も増加しておりますが、それらの発掘調査において、考古学上の重要な研究資料となる貴重な出土品が数多く発見されてきました。

長崎県では、このような貴重な埋蔵文化財を保存・公開するための方法として、これまで隨時調査報告書を刊行してきましたが、このたび、平成6年度に県下で行われた発掘調査のうち、県教育委員会で調査した遺跡の概要を年報として刊行することになりました。

本書が、埋蔵文化財保護のために広く活用されることを期待します。

平成8年3月31日

長崎県教育委員会教育長 中川 忠

例　　言

1. 本書は、長崎県における埋蔵文化財保護行政の現状と、長崎県教育委員会が平成6年4月1日から平成7年3月31日までに実施した43箇所の発掘調査の概要を収録したものである。
2. 各遺跡の調査概要中の位置図は、国土地理院発行の縮尺2万5千分の1の地図を使用し、〔 〕内は図幅名を表わす。
3. 各遺跡の調査担当者名と調査概要の文責については、各々の文末に記した。

本　文　目　次

はじめに

I	長崎県の埋蔵文化財の動向	1
1.	保護行政の現状	1
2.	調査の動向	1
3.	県内を中心とした研究会活動	5
II	各遺跡の調査概要	
	平成6年度長崎県内発掘調査箇所市町村別位置図	8
①	大石原遺跡	9
②	桜町遺跡	10
③	金田城跡	12
④	棧原城跡	14
⑤	布気川墳墓群	16
⑥	原の辻遺跡(高原)	17
⑦	原の辻遺跡(大川)	18
⑧	原の辻遺跡(江里線)	20
⑨	原の辻遺跡(カルテ)	22
⑩	原の辻遺跡(学術)	24
⑪	原の辻遺跡(河川)	25
⑫	壱岐国分寺跡	26
⑬	興原遺跡	27
⑭	宇久松原遺跡(カルテ)	29
⑮	宇久松原遺跡(住宅)	30
⑯	頭ヶ島白浜遺跡	32
⑰	浜郷遺跡	33
⑱	曲古墓群	34
⑲	寄神貝塚	36
⑳	津吉遺跡	37
㉑	女龟遺跡	38
㉒	神脇遺跡	40
㉓	下茅場遺跡	46
㉔	小浦遺跡	42
㉕	鷹島海底遺跡	44
㉖	長与堂崎遺跡	49
㉗	伊木力遺跡	50
㉘	黒丸遺跡	52
㉙	田井原条里遺跡(農道)	54
㉚	田井原条里遺跡(都市)	55
㉛	釜海中干潟遺跡	56
㉜	城ノ尾原遺跡	57
㉝	小原下遺跡	58
㉞	大野原遺跡	59
㉟	沖田遺跡	60
㉟	古枯野遺跡	61
㉟	西鬼塚石棺群	62
㉟	蒲河遺跡	64
㉟	湾頭遺跡	65
㉟	日原遺跡	66
㉟	国崎遺跡	67
III	平成6年度　長崎県埋蔵文化財発掘届・発見届一覧	68

I 長崎県の埋蔵文化財の動向

1. 保護行政の現状

1994年度に提出された発掘届出件数は203件で、内訳は別表のとおりである。前年度の168件に比べて20%強増加したことになる。なかでも道路工事、宅地、農業関連が上位を占めている。学術調査はわずか1件で、これは九州大学が文部省科学研究費を受けて実施した西海町天久保遺跡の支石墓の調査である。農業関連では本県では県営圃場整備率は60%に達しており、平野部における遺跡のかかる割合は減少しているものの、今後は中山間地域に対する依存率が高くなるものと思われる。また長崎市、平戸市では近世遺跡の取扱について、試掘調査を行った後に遺跡として認定するという手法をとっているが、見直しを検討する時期にきている。

発掘調査に携わる専門職員の配置は長崎県19人（職員16人、嘱託3人）の他8市12町（1町は嘱託）とわずかずつではあるが増員の傾向にあるものの、全県全市町村に占める割合は25%と、依然として不足している状態が続いている。今後とも未配置の解消や、増員を積極的に進めていく必要がある。

表1 開発事業別発掘等件数

	区分	件数
緊急調査	道路	32
	鉄道	0
	空港	0
	河川改修	4
	ダム建設	0
	学校	2
	住宅・宅地	29
	区画整理	5
	その他建物	17
	ガス・電気・水道	8
学術調査	工場	0
	農業関連	28
	ゴルフ場	0
	土砂採取	0
	その他開発	12
	観光開発	1
	自然消滅	0
整備	整備	4
	確認試掘	11
	公園	5
	学術調査	10
	合計	168

の土器・石器のほか木製品、石製玉、網代や木の実、種子などの自然遺物も検出された。なお次年度も調査は継続される。大村市黒丸遺跡は県道新設工事に伴う調査が続けられているが、中期の阿高式土器が若干出土しているだけで包含層には恵まれていない。後期から晩期にかけての時期の調査例は多くなる傾向にある。国見町筏遺跡は個人住宅建設に伴う調査で限られた面積であったが、後期の三万田式の深鉢などとともに住居跡が検出された。島原半島西側の南串山町国崎遺跡は、海に突出した半島の基部にあたる部分に砂丘が形成されこの上に営まれているが、後期から晩期の包含層から多くの土器とともに結晶片岩製石錐、軽石製の浮子などの道具や磨石などが出土した。またこの時期と思われる人骨も断片的ではあるが出土した。支石墓の調査も相次いだ。西海町天久保遺跡は平成3年度県内重要遺跡範囲確認調査によって位置が確認されていたが、今回は九州大学文学部考古学研究室によって支石墓2基、石棺1基と周辺にトレンチが入れられた。その結果、現在判明している以上の基數確認はできなかったものの、この時期としては僅少な管玉を下部構造の石棺内から検出するなどの成果をあげている。宇久町松原遺跡からはこれまで調査が行われた神島神社北側で新たに2基発見している。さらに島原半島南部の有家町西鬼塚遺跡からも、新たな支石墓が発見されている。

弥生時代

この時期の調査は、対馬峰町の上ガヤノキ遺跡、壱岐原の辻遺跡、佐世保市四反田遺跡、大村市黒丸遺跡などがある。上ガヤノキ遺跡は三根湾の河口部に下ガヤノキ遺跡とならんで位置する遺跡で、近隣するサカドウ遺跡やタカマツノダン遺跡とともに弥生後期の代表的遺跡である。上ガヤノキ遺跡は郵便局造成工事により、遺跡の大部分が削平されるため、峰町教育委員会により調査が実施された。その結果1号～5号の箱式石棺、土坑墓、積石墓からなり1・5号が弥生後期で鉄剣、管玉、勾玉、ガラス玉などが出土、2・3号の古墳時代の土坑墓からは丹塗複合口縁壺、新羅系土器、須恵器をはじめ、鉄剣、鉄鎌、刀子などが出土している。また腐葉土中より細形銅劍や鉄斧、勾玉などが採集され、三根湾を中心とする海人集団の中枢であることをうかがわせた。壱岐原の辻遺跡は平成5年度から幡鉢川流域総合整備事業に伴う調査が実施され、大規模な多重環濠聚落であることが確認されているが、今年度は重要遺跡範囲確認調査（遺跡カルテ事業）によって丘陵部が調査され、多数の柱穴群が検出された。東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター長宮本長二郎氏によれば、周囲が板塀で囲まれた高床式建物があり、火を使用した痕跡などから占いなどの「祭ごと」を行った特別な区画ではなかったかと推定されている。なお並行して行われた芦辺町教育委員会の調査では弥生後期の住居跡2棟と貯蔵穴、それに卜骨2点が出土している。平成2年から調査されていた佐世保市四反田遺跡からは、国道新設工事に伴い、縄文晚期終末期の土器や、弥生前末期の支石墓、弥生中期の住居跡等のほか、大量の打製石錐などが出土したことで話題になったが、今回は農業基盤整備に伴う範囲確認調査で石棺が検出された。黒丸遺跡は都市計画道路建設に伴い、昨年から継続されている。今回は弥生中期初頭の城ノ越式土器が大量に出土したほか、石錐、石斧、石庖丁、敲石、凹石などの石器や石剣、管玉などが出土した。また小児用の壺棺9基、合口甕棺1基および副葬品とみられる小壺、長頸壺を検出した。その他の遺構として掘立柱建物跡の可能性がある柱穴などがあげられる。

古墳時代

対馬において小規模な調査が実施されている。上ガヤノキ遺跡は弥生の項で述べたので省略するが、同じ峰町のチゴノハナ遺跡で整備のための再調査が行われている。かつて昭和45年に調査が行われ箱式石棺と土坑墓が3基検出され、須恵器、土師器、南鮮系陶質土器など5世紀～6世紀中頃の遺物が確認されているが、今回も同様の結果が得られている。

古代

対馬美津島町の特別史跡金田城の環境整備事業が昨年に引き続き実施され、発掘調査も進められている。浅茅湾に突出した標高275mの城山の中腹に延長約5.4kmの城壁が巡らされ、谷間の要所には3つの城戸があり水門や礎石が残る朝鮮式山城である。前回の二の城戸から三の城戸に至る所の鞍部と土壘の調査に続き、今回ビングシ山という標高83mの頂上部で行われた。当地は黒瀬浦を見下ろす格好の場所である。山頂は岩盤が露出しているが、東北の緩やかな尾根にある平地から3間×1間の掘立柱建物跡が検出された。建物の性格は不明であるが、金田城跡で城戸や石壘以外の建物跡が明らかになったのは初めてで、発見の意義は大きい。また調査区全体から7世紀後半の須恵器などが出土しており文献を裏付ける結果となっている。

中世

中世の調査としては山城、居館跡、石鍋製作所跡などがある。城跡は佐世保市武辺城跡、松浦市梶谷城跡が調査された。武辺城跡は相浦川の河口近くの平野に延びた標高40～70mの高台に構築された城で、地元では古城山と呼び、相神浦城の跡とも伝えられている。試掘の結果、主郭部に直径80cm、間隔2.9mの直線に並ぶ大型建物跡と思われる柱穴3基を検出した。梶谷城は4年目の調査を迎えるが、これまでに居館周辺や大手口周辺の調査が行われ、今年度は主郭部の調査が実施されている。遺物は中国産の青磁、染付けや李氏朝鮮の白磁、古唐津、備前などの陶磁器類が出土し、海側の斜面にタテ堀や物見台跡などの遺構が検出された。これまでの調査結果や奈良女子大の村田修三氏の観察では現在見えている石垣の構築法からすると新しい年代が与えられるのではないかという見解もあるが、従来の山城を補強したことと考えられ、最初の築城時期に関しては解決されていない。

対馬豊玉町桜町遺跡は、貞和元年（1345）に宗氏が対馬支配の拠点のため島内交通の要衝であった仁位の中村に設置した政庁（仁位館）跡である。豊玉高校造成中にもかなりの朝鮮系陶磁器が採集されており注目された所であった。今回は同高校の運動場整備のため試掘調査を行ったもので、中国産陶磁器、高麗青磁、粉青沙器、土師器などの中世の遺物が出土するとともに、井戸跡、柱穴、土坑などの遺構が検出されている。なおこの遺跡は、工事の設計変更により盛土が行われ、保存が図られた。上県町では、大石原遺跡が農道工事に伴い調査され、掘立柱建物跡と思われる多数のピット、不定形土坑、溝を検出した。出土遺物には龍泉窯、同安窯系の青磁をはじめとする中国産の青磁、白磁、初期高麗青磁、象眼青磁、朝鮮製無釉陶磁器などの輸入陶磁器や須恵器、土師器、瓦器などの国産品がある。なかでも輸入陶磁器の比率が極めて高く、しかも優品が多い。時期的には12～13世紀頃が考えられる。地理的には佐護川の中流域にあたり、河口には佐護湊が位置する。さらにこの地区にはわが

国最古の北魏仏も発見されており、遺跡の範囲も広いことから今後も注目される地域である。

鷹島町の鷹島海底遺跡は、元寇関係遺跡として著名であるが、今年も神崎港防波堤建設工事に伴う緊急調査が実施された。調査は水中考古学の手法によって行われた。その結果、元寇関係資料と断定できる保存状態の良好な木製碇3点が出土した。これは、2個の碇石とセットで使用することが明らかで、アジア初例であることから、大きな注目を集めめた。

生産遺跡としては、西彼町下茅場遺跡が広域農道新設に伴って試掘調査され、滑石製石鍋製作所跡を検出した。狭い範囲ながらも7箇所の遺構が確認され、採掘痕が顕著なものや、坑道掘りの例もあり、製作工程が判明する貴重な例を追加した。この遺跡はその後の協議で設計変更による保存が決定した。

若松町曲古墓群の調査も2年目を迎えた。今回は町道から南側地区の整備と、それに伴う調査である。礫丘上に立地する中世の五輪塔2基の下部が発掘され、棺床面から同安窯系の青磁、口禿の白磁、土師質土器等が出土した。その他に和鏡1面、瓦質火鉢2個などがあり、14世紀の前半頃からのものと考えられる。なお今回は弥生土器や須恵器も出土していることから、長期にわたる遺跡の存続幅が確認された。

近世

近世では城館跡、屋敷跡、墓地などの調査が行われた。

城館の調査では、蕨原町桟原城跡、国指定史跡原城跡の調査がある。桟原城跡は自衛隊隊舎建築工事に伴うもので、本丸北側隅の石垣や暗渠の遺構が確認されるとともに、下層から朝鮮系陶磁器が一括で出土した。また18世紀後半を主体とする近世陶磁器や瓦も大量に出土している。

原城跡の調査は史跡整備のための調査で、本丸を中心に行われている。これまで古絵図では明確でなかった階段遺構が検出され、原城の構造を明らかにするうえで大きな成果をあげた。主な出土遺物にはクルス、メダイ、ロザリオなどのキリスト教関係の遺物や火縄銃の弾丸など寛永15年(1638)の「島原の乱」を彷彿とさせる資料のほかに、本丸跡から「乱」の犠牲者のものと思われる焼けた人骨が数多く出土した。

長崎市では、江戸時代の元禄12年～15年に中国貿易の輸入品収蔵のため築造された、新地唐人荷蔵跡がホテル建設に伴って調査され、北東西側の護岸石垣ラインが明らかになった。外国人居留地となつたのち、明治以降埋め立ての進行でその範囲は不明確となっていた。石垣の築造方法は一辺30～40cm大の砂岩製の間知石を8～10段積み上げ、石材が直線に並ぶ、「布目積」の工法で築かれていた。福江市では武家屋敷跡が調査された。福江市は石田城の城下町であったが、その大部分は昭和38年の大火によって焼失した。今回わずかに残った武家屋敷の解体復元に先立つて調査が行われた。屋敷の北西部に明治中頃の増築の跡が見られるものの、検出された碇石や碇石抜取痕?から旧武家屋敷のものと思われる遺構が検出された。出土遺物は近世陶磁器で占められていた。

生産遺跡としては、波佐見町の古窯跡群の調査が継続されている。今年度は古皿屋窯跡、鳥越窯跡の2箇所が調査された。古皿屋窯跡は19の窯室をもつ階段状連房式登窯で、なかでも灰釉皿がすば抜

けて多かった。鳥越窯跡は陶器から磁器への移行期のものと推定される。連房式登窓で、操業年代は1630年～1640年代頃と比較的短い。

墓地の調査では壱岐勝本町布気川遺跡がある。町道新設工事に伴って調査された江戸時代中期以降の農民の墓で、板石積の基壇の上に自然石を立てた簡素なもので、下部は岩盤が直径1m程の円筒状に削り抜かれ、屈葬の状態で埋葬されていた。副葬品として寛永通宝、キセル金具、虎と思われる型抜きした焼物、皿類がある。墓地は全部で11基調査された。また同じ墓地内で牛が埋葬されていた大きな楕円形土坑墓が検出された。これは人と家畜が同じ墓所に埋葬されるという貴重な事例といえる。

以上が1994年度、県内における主要な発掘調査の概要であるが、この他にも市町村では緊急調査が実施されたことを付記したい。

3. 県内を中心とした研究会活動等

県教育委員会では埋蔵文化財の理解と専門知識の習得を目的に「長崎県埋蔵文化財発掘技術研修」を継続して実施している。基礎課程はⅠ期・Ⅱ期に分けて行った。Ⅰ期は県・市町村の開発事業担当者および実務担当者を対象に、文化財保護法による遺跡の発見、発掘の届出・通知の仕方、出土遺物の取扱い、調査費用の積算の根拠など一連の流れについての研修である。Ⅱ期は主として野外実習ということで、3泊4日の日程で県教育センターと大村市玖島崎古墳群を対象に平板測量と石室実測および発掘の基礎的な事項の研修を行った。専門課程では、長崎大学名誉教授鎌田泰彦による「地質・岩石の基礎知識」と題する講演および野外実習と、名古屋大学教授渡辺誠による「西北九州における縄文時代の生産活動」の講演が行われた。

長崎県考古学会の秋季大会が「五島列島の原始古代」をテーマに小値賀町の離島開発センターで開催された。これは小値賀町歴史民俗資料館開館5周年記念事業とタイアップしたもので、内容は福岡大学教授小田富士雄による「五島列島の考古学」と題する記念講演のち、地元町教育委員会塙原博による「近年の遺跡調査から」および山口県の土井ケ浜人類学ミュージアム館長松下孝幸による「人類学から見た五島列島」という2編の発表があった。2日目には「五島列島の歴史と文化をさぐる」というテーマのもとに元早稲田大学教授瀬野精一郎の「中世期五島住人の生活と文化」、大村高校教諭大石一久の「石造物から見た五島列島の様相」の発表とシンポジウムが行われた。

文 献 一 覧

〔論文その他〕

縄文時代

1. 安楽 勉 1994 「対馬における韓国新石器時代文化との交流」『考古学ジャーナル』第376号
2. 副島和明 1994 「壱岐・原の辻遺跡について」『考古学ジャーナル』第376号
3. 副島和明・山下英明・松永泰彦 1994 「大規模な多重環濠集落—長崎県原の辻遺跡—」『季刊考古学』第49号

古墳時代

4. 宮崎貴夫 1994 「長崎県」「日本土器製塩研究」

古代

5. 高野晋司 1994 「若岐島分寺」「考古学ジャーナル」第376号

中世

6. 阿比留伴次 1994 「対馬における中世の鏡について」「考古学ジャーナル」第376号

7. 安東 勉・阿比留伴次 1994 「中世の対馬—朝鮮陶磁器を中心にして—」「長崎県の考古学」中・近世特集

8. 中田敦之 1994 「松浦市における中世遺跡の紹介」「長崎県の考古学」中・近世特集

9. 塚原 博 1994 「五島列島における貿易陶磁器出土遺跡」「長崎県の考古学」中・近世特集

10. 加藤有重 1994 「平戸和蘭商館跡出土中国舶載陶磁器について」「長崎県の考古学」中・近世特集

11. 宮崎貴夫 1994 「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題—特に県本土部地域を中心として—」「長崎県の考古学」中・近世特集

12. 久富達弥・村川逸郎 1994 「北高来郡『月の港』周辺の山城と城館跡一岡城・圓城を中心として—」「長崎県の考古学」中・近世特集

13. 大石一久 1994 「県下にみられる関西形式宝篋印塔の分布について—特に対馬・五島若松日ノ島を中心として—」「長崎県の考古学」中・近世特集

近世

14. 扇浦正義 1994 「長崎港市における近世輸入陶磁の様相」「長崎県の考古学」中・近世特集

15. 立平 進 1994 「対馬・豆駒、榧ばの遺跡」「考古学ジャーナル」第376号

〔報告書〕

各時代にわたるもの

16. 長崎県教育委員会 1994 「長崎県遺跡地図—長崎市・諫早市・大村市・西彼杵郡・北高来郡地区—」長崎県文化財調査報告書第110集

17. 長崎県教育委員会 1994 「長崎県遺跡地図—島原市・南高来郡地区—」長崎県文化財調査報告書第111集

18. 長崎県教育委員会 1994 「長崎県遺跡地図—壱岐地区—」長崎県文化財調査報告書第112集

19. 福田一志編 1994 「長崎県埋蔵文化財調査年報！」長崎県文化財調査報告書第113集

20. 寺田正剛編 1994 「県内重要遺跡範囲確認調査報告書II」長崎県文化財調査報告書第114集

21. 萩原博文・加藤有重 1995 「川内紅毛キリシタン関連遺跡・湯牟田遺跡！」平戸市の文化財39平戸市教育委員会

旧石器時代

22. 中田敦之 1994 「松浦市内遺跡確認調査(1)」松浦市文化財調査報告書第11集 松浦市教育委員会
長崎県教育委員会

23. 田川 重編 1994 「県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」長崎県文化財調査報告書第116集
長崎県教育委員会

24. 福田一志編 1995 「長与堂崎遺跡」長与町文化財調査報告書第6集 長与町教育委員会

25. 松藤和人編 1994 「百花台東遺跡」同志社大学文学部考古学調査報告第8冊

縄文時代

26. 本田秀樹編 1994 「中木場遺跡—水無川第3遊砂地造成工事に伴う発掘調査報告書—」長崎県文化財調査報告書第115集 長崎県教育委員会

27. 安東 勉 1994 「畠中遺跡」島原市文化財調査報告書第9号 島原市教育委員会

弥生時代

28. 久村貞男 1994 「四反田遺跡発掘調査報告書(第1次)」佐世保市教育委員会

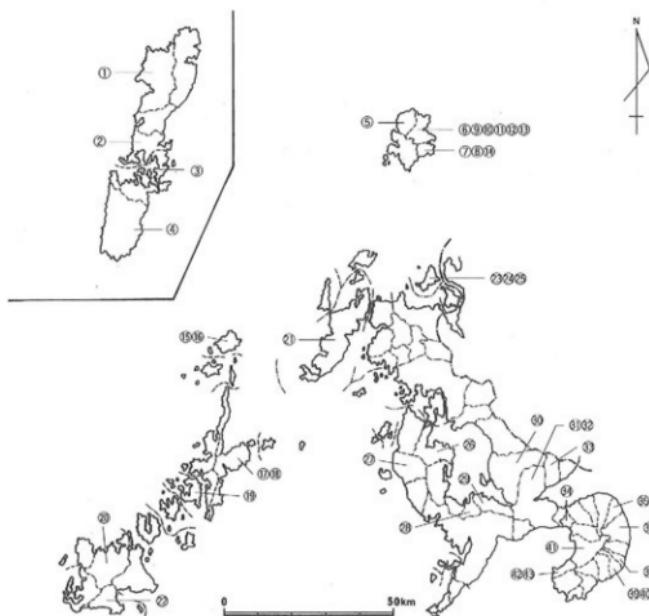
29. 久村貞男 1994 「四反田遺跡発掘調査報告書」佐世保市教育委員会

30. 阿比留伴次 1995 「峰町の遺跡－三根海岸の遺跡－」峰町埋蔵文化財調査報告書第13集峰町教育委員会
近世
31. 中野雄二 1994 「下稗木場窯跡・三段古窯跡・永尾高麗窯跡」波佐見町文化財文化財調査報告書第5集波佐見
町教育委員会

(郷土誌)

32. 久原巻二 1995 「原始時代の長与町」「長与町郷土誌」長与町
33. 正林 譲 1995 「弥生時代・古墳時代・古代の長与町」「長与町郷土誌」長与町
34. 川道 寛 1995 「考古学にみる多良見町」「多良見町郷土誌」多良見町
35. 久原巻二 1995 「原始」「大島町郷土誌」大島町

II 各遺跡の調査概要



平成 6 年度長崎県内発掘調査箇所

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|--------|--------|--------|----------|-------------|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------|---------|----------|--------|---------------|--------------|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|----------|---------|--------|----------|---------|--------|---------------|---------------|-----------|----------|---------|---------|--------|---------|----------|--------|--------|--------|--------|
| ① 大石原遺跡 | ② 桜町遺跡 | ③ 金田城跡 | ④ 栓原城跡 | ⑤ 布気川墳墓群 | ⑥ 原の辻遺跡(高原) | ⑦ 原の辻遺跡(大川) | ⑧ 原の辻遺跡(江里線) | ⑨ 原の辻遺跡(カルテ) | ⑩ 原の辻遺跡(学術) | ⑪ 原の辻遺跡(河川) | ⑫ 岩岐国分寺 | ⑬ 古岐氏居館跡 | ⑭ 興原遺跡 | ⑮ 宇久松原遺跡(カルテ) | ⑯ 宇久松原遺跡(住宅) | ⑰ 頭ヶ島白浜遺跡 | ⑱ 浜郷遺跡 | ⑲ 曲古墓群 | ⑳ 寄神貝塚 | ㉑ 津吉遺跡 | ㉒ 女鬼遺跡 | ㉓ 神脇遺跡 | ㉔ 小浦遺跡 | ㉕ 鹿島海底遺跡 | ㉖ 下茅場遺跡 | ㉗ 小田貝塚 | ㉘ 長与堂崎遺跡 | ㉙ 伊木力遺跡 | ㉚ 黒丸遺跡 | ㉛ 田井原条里遺跡(農道) | ㉜ 田井原条里遺跡(都市) | ㉝ 笠海中干潟遺跡 | ㉞ 城ノ尾原遺跡 | ㉟ 小原下遺跡 | ㉟ 大野原遺跡 | ㉟ 沖田遺跡 | ㉟ 古枯野遺跡 | ㉟ 西兎摩石柏群 | ㉟ 蒲河遺跡 | ㉟ 湾頭遺跡 | ㉟ 日原遺跡 | ㉟ 四崎遺跡 |
|---------|--------|--------|--------|----------|-------------|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------|---------|----------|--------|---------------|--------------|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|----------|---------|--------|----------|---------|--------|---------------|---------------|-----------|----------|---------|---------|--------|---------|----------|--------|--------|--------|--------|

① 大石原遺跡

所 在 地 上県郡上県町大字佐護字屋敷畠

調査主体 上県町教育委員会

調査原因 農道敷設

調査面積 297m²

調査期間 平6. 2. 27～平6. 3. 17

処 置 調査後工事

報 告 書 平成7年度刊行予定

立 地

大石原遺跡は、対馬島北西の上県町佐護に位置する。本遺跡は佐護川の支流である中山川の右岸にあり国道382号線に接する水田地帯に立地する。標高は約8mである。現在、この地域は水田となっているが、戦後に水田として改良したもので、以前は畠地であったらしい。

調 査

遺跡は12世紀を中心とした集落跡で、一辺が8間を越す大型建物跡や多数のピット、不定形土坑、溝が出土した。遺物の中でも特筆すべきことは、出土土器に占める輸入陶磁器の比率の高さである。対馬における輸入陶磁器研究はこれまで神社などに供献埋納されたものや、伝世品を中心におこなわれていたが、今回の調査により日常的な使用状況が明らかとなる可能性がてきた。正確な統計は今後の分析が必要だが、出土土器の9割は輸入陶磁器という状況で、そのうち中国製陶磁器と朝鮮製陶磁器の出土比率は両者拮抗している。具体的には北宋後半代の白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、青白磁、褐釉陶器、初期高麗青磁、高麗象嵌青磁、朝鮮製無釉陶器などがある。

まとめ

今回の調査により対馬では初めて中世の掘立柱建物跡を確認した。さらに輸入陶磁器が遺構からまとめて出土したことでも初めてであった。

【調査担当：高野・古門】（文責：古門）



大石原遺跡位置図【佐護】(1/25,000)



輸入陶磁器出土状態
右より同安窯系青磁皿、朝鮮製無釉陶器、高麗青磁

② 桜町遺跡(仁位館跡)

所在地 下県郡豊玉町仁位1331-2

調査原因 県立高校運動場整備

調査期間 平6. 8. 22～平6. 9. 2

報告書 未刊行

調査主体 長崎県教育委員会

調査面積 122m²

位置 設計変更により保存

立地

桜町遺跡は、豊玉町の中央部である仁位の北部天神山の山裾に立地する、弥生時代から中世にかけての遺物散布地・館跡である。仁位の集落は、三方を山地で囲まれ、仁位浅茅湾の最深部に開けた平地上に形成されており、町役場・学校・商店街など町政・工商の中心地として機能している地域である。当地にある県立豊玉高校は、昭和51年に新校舎が建設されており、建設工事の際に多量の遺物の出土が確認されたことから、校舎・運動場を含む地域を桜町遺跡として周知している。

この地は、貞和元年（1345）筑前宗像に居を据えた宗盛国が、島政改革のために次男頼次を対馬に派遣しており、その中心地として政府が開かれた地域である。その後、佐賀に政府が移転するまでの約50年間、島政の要衝の地として機能していた。明治の字図には館跡を中心として周辺に短冊型地割がなされており、当時の町屋跡の名残が窺われる。また、現在の校舎裏の山裾には、仁位館顕彰碑と祠が建てられている。

調査

今回の調査は、豊玉高校運動場・テニスコートの整備工事に伴うものであり、28箇所の試掘坑を設定し実施した。調査はまず、表土を重機で刺ぎ取り、その下を人力で掘削したが、グラウンド部は数回の転圧により硬くしまっており、かなり難航した。

校舎裏のテニスコート部は、アスファルトで表層されているため、カッターで切断した後に重機掘削を行ったところ、昭和51年の新校舎建設の際の盛土跡が約1.5m観察され、その下から中世・古墳時



桜町遺跡位置図【仁位】(1/25,000)



桜町字図（明治9年）

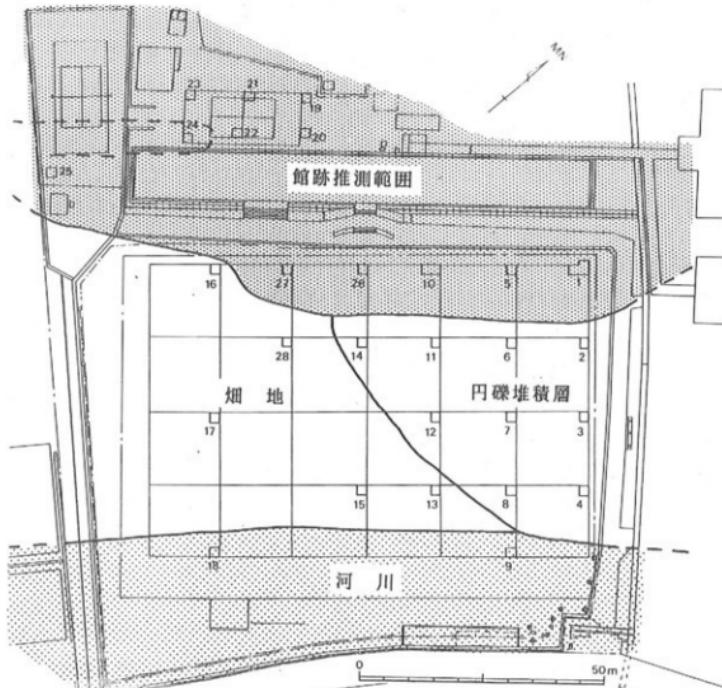
代の遺物が出土した。

グラウンド部では、校舎側 TP.1・TP.5・TP.10・TP.26・TP.27において遺物包含層を確認し、中國製青磁・白磁・高麗青磁・朝鮮青磁・粉青沙器・土師質土器等の中世の陶磁器および土師器・陶質土器等の古墳時代の遺物などが出土した。また、TP.1では井戸跡、TP.10では柱穴、TP.27では炭化物土坑が検出し、その周囲に白銅鏡が出土したが、いずれも中世のものと考えられる。

まとめ

今回の調査で、仁位館に関する遺構・遺物が現校舎周辺の試掘坑で確認できたことによって、当地に館跡が存在することは疑う余地はない。また、その下には古墳時代の遺構の存在も推測される。テニスコート部については、当初計画案としてグラウンドの校舎側を約50cmほど掘削する予定であったことから、設計変更もしくは本調査の必要があったが、協議の結果、盛土工法により掘削は回避され、遺跡は保護されることとなった。

【調査担当：寺田】（文責：松尾）



桜町遺跡周辺旧状推定図 (1/1,000)

③ 金田城跡

所在 地 下県郡美津島町大字黒瀬および箕形地内

調査原因 史跡整備

調査期間 平6. 9. 26～平6. 11. 2

報告書 未刊行

調査主体 美津島町教育委員会

調査面積 210 m²

處 置 調査後埋め戻し

立 地

調査は金田城内の通称ビングシ山で実施した。ビングシ山は、黒瀬浦から見た山の姿が女性の贊櫛に似ていることからその名がついたといわれている。標高は83mでさほど高くはないが、海上からはひとつの独立した山のように見える。この山には北東と南西側から深く谷が入り込み、それぞれに二ノ城戸・三ノ城戸が設けられている。山の裏側が鞍部となっており、平成5年度の調査では門礎石を新しく確認している。城戸一帯を広く見渡せる格好の条件を備えたこの山は、城山のなかでも中核的な役割を担っていた場所と推測される。

調 査

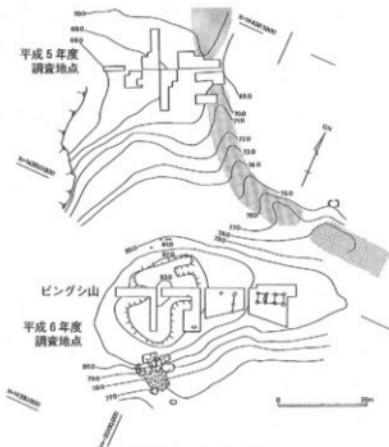
ビングシ山頂部付近は比較的傾斜が緩やかで、ハ字形にのびる尾根には幅が狭いながらも平坦に近い場所があった。実際に伐探してみると、頂上部こそ岩盤がむき出しで、何ら遺構を確認し得なかったものの、東北東の尾根筋では階段状に岩盤を削平し、意識的に整地したと思われるような場所が2か所で見られた。それぞれの平地では60cm×50cmほどの平石が1個ずつ露出しており、何らかの遺構と係わりがあるものと考え、これら平石を中心に調査を進めていった。

調査はまず山頂から東北東に延びる尾根上に

10m間隔で基準杭を打ち、9m×2mのトレンチを3か所設定した。トレンチはそれぞれ頂上から順にE 1区・E 2区・E 3区とした。同様に山頂西側にも1か所トレンチを設定し、W 1区とした。



金田城跡位置図【二位】(1/50,000)



調査地点 地形測量図

発掘は平坦地でかつ平石のあるE 2区・E 3区から着手した。いずれも地表から30~40cmで地山および岩盤に達したが、須恵器がわずかに表採された以外に遺構・遺物は確認できなかつた。南側へ拡張して精査を行ったところ、E 3区で一辺が約60cm四方の方形ピット8個を確認した。ピットは全て岩盤を掘込んでつくられており、残存する深さは60~70cm。各ピットの間隔は190~200cmを測る。北側と東側にも調査区を拡張してみたが、他のピットを確認するには至らなかつた。結果的に、3間×1間の掘立柱建物跡が1棟と判明した。ピット内から遺物の出土はなかつたが、E 3区の北西部分で須恵器片・土師器片が数点出土している。須恵器の一つは蓋の特徴から、概ね7世紀後半頃と考えられるものであった。

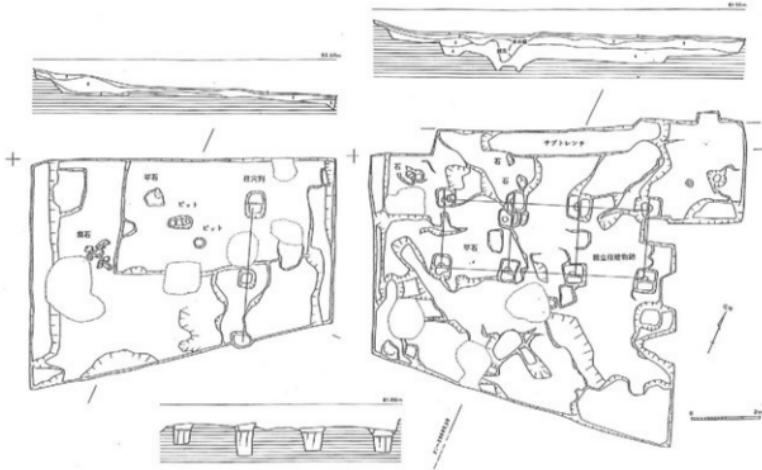
まとめ

今回の調査成果として、掘立柱建物跡の確認があげられる。金田城跡で建物跡が見つかったのはこれが初めてである。ビングシ山にこのような施設があることは、門櫓石や長大な土塁を確認できた鞍部と相まって、金田城の中核部としての役割を担っていたと考えられるだろう。ビングシ山の西側尾根には同様な平地がまだ残存しており、今後新たな施設が発見される可能性も高いと思われる。

〔調査担当：本田・寺田〕（文責：本田）



掘立柱建物跡



E-2区、E-3区、平面図

④ 桟原城跡

所在地 下県郡敵原町桟原

調査主体 敵原町教育委員会

調査原因 自衛隊隊舎建設

調査面積 700m²

調査期間 平6. 9. 26～平7. 1. 13

処置 調査後工事

報告書 平成7年3月刊行

立地

北に振袖山（312m）、西に成相山（416m）、東は後山（166m）に囲まれた敵原の北部、標高30mを測る丘陵上に築造された近世城郭である。

城は、万治元年（1658）に時の宗家21代藩主義真が築城を開始し、延宝6年（1678）までの18年の年月をかけて完成した。それ以前の金石城から館を桟原に移転した理由として、朝鮮通信使の来朝に際し、金石城では手狭で威容を示すことができないとして、新城の建設が発令されたことによるとされる。

調査

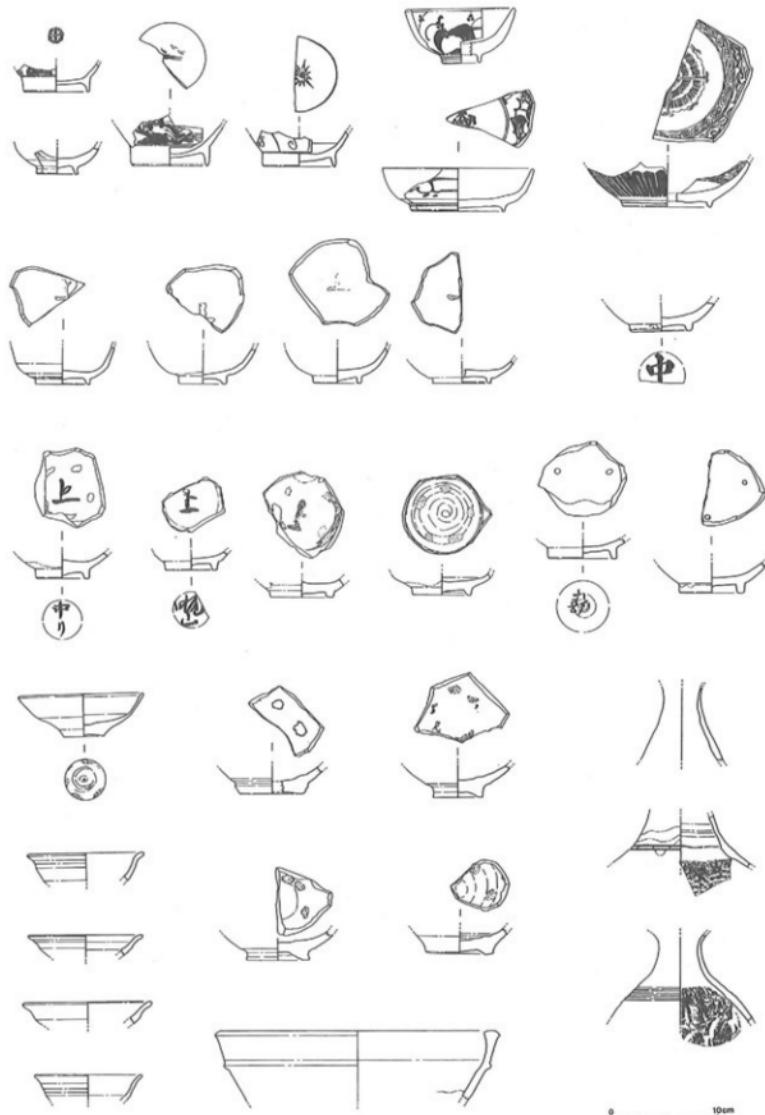
現在、桟原城は自衛隊の敷地内にあり、現在の隊舎が手狭になったことから、城内に隊舎建設が計画され、それに伴い発掘調査が実施されることとなった。調査面積は、主郭部への上り口付近にあたる、約700m²で実施された。主な遺構として、主郭を取り巻く石垣遺構の一部、溝状遺構、暗渠遺構、建物の礎石等が検出されたが、後世による搅乱が著しく、現状をとどめるものは数少ない。特に登り口付近は坂となっており、この下に階段上の遺構が確認されるものとの期待があったが、検出することはできなかった。但し、坂の盛り土を除去した状態で、石垣最下面と同じレベルの版築したような硬質の面が5mほど検出され、この石垣の間になんらかの施設があったことが予想された。

遺物は、石垣の裏込めからの出土が主体で、18世紀後半の近世陶磁器を主体とする。の中でも、対州焼と称される、大量の陶器碗が出土したことは特筆される。この陶器碗は、目跡、焼成などに変化があり、最大の特徴として、見込に上・中などの文字を入れていることである。また、主郭の平坦部では、上部はかなり削平されていたが、その下の桟原下層と呼称した、朝鮮王朝陶磁器を主体とする遺物が出土する層が確認され、小片をも含めて数百点の陶磁器の出土があった。その多くは、16世紀代のものに相当すると思われるが、陶磁器のなかにも多くのバリエーションがみられ、まだ細分が可能と考えられる。



桟原城跡位置図〔敵原〕(1/25,000)

【調査担当：福田・小磯】(文責：福田)



桙原城跡出土 近世陶磁器・李朝陶磁器

⑤ 布気川墳墓群

所在地 壱岐郡勝本町布氣触字布氣川729

調査主体 勝本町教育委員会

調査原因 農業農村活性化農業構造改善事業に伴う

調査面積 150m²

鯨伏地区連絡農道整備事業

処置 調査後工事

調査期間 平7.1.18～平7.2.3

報告書 未刊

立地

遺跡は国道382号の亀石から少し北側に寄った所から西側に折れ、湯ノ本湾が見渡せる標高約90mの傾斜地に位置する。東側に水神社、北側には壱岐名勝図誌に見える谷上山長寿院庵寺跡がある。墓地の範囲は狭く、同規模のものが周辺に2個所みられる。

調査

墓地は農道工事に伴う事前の分布調査の折に



布気川墳墓群位置図 [湯本] (1/25,000)

発見されたもので、当初は6基程度と見られていた。伐採を進め腐植土を取り除いていくと、遺構は12基に達した。形態は外観から板石を方形に組み合わせ、その上に礫を混入するもの、集石の状況を呈するものに分けられる。

2号墓から7号墓は上部石組遺構を取り除くと蓋石があり、その下部には深い穴が地山面に掘られている。ほとんどのものが土が若干堆積しているだけで空洞になり、人骨が頭を上にした屈葬の状態で残されていたが、保存の度合いはやや良程度である。もっとも上部遺構のしっかりした3号遺構の副葬品は茶碗1、碗底部1、皿破片1、銭4枚であった。銭は寛永通宝で、6号からも出土している。そのほかキセルを副葬していたものも2基ある。時期については遺物から1800年代が考えられる。

人間を埋葬した墓地のほかに、動物を埋葬した遺構が確認された。8～11号がそれである。表面には数個の自然石が置かれ、下部は長方形に掘り込まれている。その中に牛骨が確認された。保存状態は極めて悪いが、10号遺構の遺存状況は頭骨や四肢骨が把握できるものであった。11号遺構の土坑内上部には小さなアワビ貝が入れてあった。

まとめ

壱岐島では現在も小集落単位で墓地が営まれ、家族墓的な様相を呈している。本墓地もその系譜を引くものと思われ、副葬品からも窺われる。また動物と人間の埋葬が同一の場所にされていたことは近世墓地として家畜との共存を考えるうえで興味深い一例であると言えよう。

[調査担当：安楽] (文責：安楽)

⑥ はるつじ 原の辻遺跡

所 在 地 壱岐郡芦辺町深江鶴亀触、深江平触

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 農業関連（圃場整備事業）

芦辺町教育委員会

調査期間 平6.12.24～平7.3.31

調査面積 2,270m²

報 告 書 未刊行

処 置 調査後工事

立 地

遺跡は、壱岐島の南東、芦辺町と石田町の町境に位置し、島内最長の幡鉾川が形成した沖積地のなかに舌状に突出した標高8～18mほどの低い台地と、標高5mほどの現水田面に立地している。今回の調査地点は、幡鉾川の北側および南側の現水田面、標高約5mの地点である。

調 査

調査は当該工事区域の遺跡にかかる部分の道路建設および排水路工事部分について実施した。

幡鉾川の北側の調査区では、土坑21基と多数のピットが確認され、弥生時代中期の生活跡と考えられる。また、この生活跡を切って作られた古代の道路と考えられる遺構が確認された。そのほか、弥生時代の溝が1条、年代不明の溝が1条確認された。

幡鉾川の南側の調査区では、平成5年度に確認したV字溝の延長部分を検出した。また、年代不明のV字溝とU字溝をそれぞれ1条づつ検出した。そのほか、昭和14、15年頃にこの付近の区画整理が行われる以前の畔道の遺構である石組遺構を検出した。



原の辻遺跡調査位置図〔芦辺〕(1/25,000)



調査区図

〔調査担当：副島・町田・山下・川口・石尾・松永〕（文責：石尾）

⑦ 原の辻遺跡

所 在 地 岐阜県石川町石田西触字大川

調査原因 農業関連（圃場整備事業）

調査期間 平6.7.19～平6.8.4

報 告 書 未刊行

調査主体 長崎県教育委員会

石川町文化財保護協会

調査面積 838.8m²

処 置 調査後工事

立地

原の辻遺跡は、壱岐島の南東部に位置する平野「深江田原」(ふかえたばる)に突き出た舌状台地を中心広がっている。台地の標高は8～18mと低いが、平野全体を眺望できるほどの好位置にある。遺跡のすぐ北には幡鉢川が流れ、約1km下流の内海に注いでいる。また、遺跡の南方約1kmの位置には印通寺港があり、古代には驛家が置かれていた。

調査

今回の調査は、農道拡幅工事中に古代の遺物が採集されたことに伴って、緊急発掘調査を実施したものである。工事区域に4.5×5mのグリッドを1から30まで設定し、道路の東側にAトレンチ、北に約80m離れた地点にBトレンチを設定して行った。

調査の結果、第4層の暗茶褐色土層から平安時代前半を主体とする遺物が出土した。遺物は越州窯系青磁、白磁I類、長沙窯系磁器等の初期貿易陶磁器や国产の綠釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器、製塙土器、滑石製石鍋等が出土した。また、円面鏡の脚部が出土していることから、これらの遺物は官衙的な性格を示しているといえる。この遺物包含層は、調査グリッドの15から30区とBトレンチで確認された。Bトレンチでは、30～50cm大の岩を1列に並べた性格不明の配石構造が確認された。

まとめ

今回の調査で出土した遺物は、平安時代前半を主体としており、初期貿易陶磁器や鏡が含まれるなど官衙的性格を示している。この遺物包含層は北側台地上からの流れ込みと考えられ、台地上には主体となる遺構が残っている可能性もある。

壱岐島は奈良・平安時代に大陸への中継点として重要な役割を果たしていたことが「六国史」などの文献からわかるが、国府や郡家の所在については不明な点が多い。今回の調査で確認された遺構や遺物は、この問題に一石を投じるものとして評価されよう。



原の辻遺跡調査位置図 [芦辺] (1/25,000)

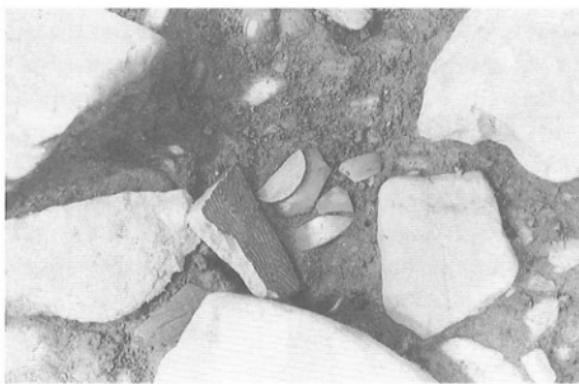
【調査担当：副島・山下・川口】(文責：川口)



調査区位置図



調査風景



遺物出土状況

⑧ 原の辻遺跡

所在 地 壱岐郡石田町石田西触、池田東触

調査主体 石田町文化財保護協会

調査原因 道路改良

調査面積 720m²

調査期間 平6. 3. 14～平6. 6. 30

処置 調査後工事

報告書 平成6年度刊行

立地

原の辻遺跡は、壱岐島の南東部に位置する平野「深江田原」（ふかえたばる）に突き出た舌状台地を中心広がっている。台地の標高は8～18mと低いが、平野全体を眺望できるほどの好位置にある。遺跡のすぐ北には櫛鉢川が流れ、約1km下流の内海に注いでいる。また、遺跡の南方約1kmの位置には印通寺港があり、古代には驛家が置かれていた。

調査

調査は、町道江里線の改良工事に伴うもので、平成5年度に行われた試掘調査の結果にもとづいて本調査が必要とされた3地区について実施したものである。江里線は原の辻遺跡を東西に横断しており東側からI、II、III区とした。

I区では、奈良時代後期から平安時代にかけての遺物包含層が確認された。出土遺物には貿易陶磁器では、越州窯系青磁、白磁I類、長沙窯系磁器、新羅・高麗系陶器等が、国産のものでは、縄釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器、製塙土器、滑石製石鍋等がある。中でも須恵器には墨書のあるものが1点含まれていた。遺構が確認されなかったことから、これらの遺物は北側の台地からの流れ込みと考えられる。付近とくに台地上には官衙的な性格の遺構などが残っている可能性がある。

II区では、遺構・遺物包含層とともに確認されなかった。調査区付近にはかつて谷が入り込んでいたものと考えられる。

III区では、弥生時代の溝状遺構と箱式石棺墓が4基確認された。箱式石棺墓は棺材が抜き取られ、地面にその痕跡のみが残っていた。溝の細かい時期や性格は不明であるが、箱式石棺墓と同時期のものであれば、それを区画するものである可能性もある。なお、この溝状遺構は昭和52年に行われた長崎県教育委員会の調査でも隣接した試掘坑で確認されている。



原の辻遺跡調査位置図〔芦辺〕(1/25,000)

〔調査担当：山下・川口〕〔文責：川口〕



調査区位置図



III区調査風景

⑨ 原の辻遺跡

所在地 壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字原

調査原因 遺跡カルテ

調査期間 平6.8.22～平6.10.7

報告書 平成7年度刊行予定

調査主体 長崎県教育委員会

調査面積 766m²

位置 調査後埋戻し

立地

原の辻遺跡は、壱岐島の南東部に位置する平野「深江田原」(ふかえたばる)に突き出た舌状台地を中心広がっている。台地の標高は8～18mと低いが、平野全体を眺望できるほど好位置にある。遺跡のすぐ北には幅鉢川が流れ、約1km下流の内海に注いでいる。また、遺跡の南方約1kmの位置には印通寺港があり、古代には驛家が置かれていた。

調査

調査は、原の辻遺跡の中心部分と想定されている台地頂上部を中心に35箇所の試掘坑を設定して行った。調査の結果、19の試掘坑で弥生時代から古墳時代初頭にかけての遺物包含層と遺構が確認された。台地頂上のO区では126個のピットが確認され、この場所が弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて利用されていたことがわかった。また、7つの試掘坑で溝状遺構が確認された。台地の北東側のTP.5では溝が三叉路に別れている状況がわかり、環濠との関係が注目される。O区の西側では、かつて県教委が実施した範囲確認調査で溝が確認されていたが、今回そこに隣接して設定したTP.19・20において再度確認され、この溝が東西方向に伸びていることがわかった。O区の南側に設定したTP.24・25でもそれぞれ溝と考えられる遺構が確認されたが、溝であれば平行して走っていることになり、このどちらかがTP.19・20の溝と結ばれる可能性もある。さらに南側のTP.31でも東西に走る溝が確認され、環濠との関係が今後検討されよう。それ以外の遺構では、TP.15で円形、TP.16で方形の住居跡と考えられる遺構が確認された。

出土遺物としては、各試掘坑から弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土器が出土したほか、O区のピットから鉄鎌、TP.16の住居跡内から不明鉄製品、TP.20の溝から銅鎌、TP.24の溝からガラス小玉などが出土している。

これらの遺構・遺物は、弥生時代から古墳時代初頭にかけてこの台地上に多くの人が住み、活動していたことを示している。

【調査担当：副島・町田・山下・川口・石尾】(文責：川口)





試掘査 位置図

試掘査	大きさ (m)	おもな遺構・遺物の出土状況
TP. 1	2×5	
2	2×5	
3	2×5	
4	1×10	落ち込み、ピット、弥生土器
5	1×10	調査溝、弥生土器
6	2×5	ピット、弥生土器
7	2×5	ピット、弥生土器
8	2×5	ピット、弥生土器
9	2×5	
10	2×5	ピット、弥生土器
11	2×5	ピット、弥生土器
12	2×5	ピット、弥生土器
13	2×5	ピット、弥生土器
14	1×30	ピット、弥生土器
15	2×10	ピット、住居跡?、落ち込み、弥生土器
16	2×7	住居跡、ピット、不明鉄製品、弥生土器、カマド石
17	1×5	
18	1×12	調査溝2条、ピット、弥生土器
19	1×13	調査溝2条、ピット、弥生土器
20	1×5、1.5×7	調査溝、ピット、廻塀、弥生土器
21	1×2	
22	1×12	
23	1×15	
24	2×5	調査溝、ガラス小玉、弥生土器
25	2×5	調査溝、弥生土器
26	2×5	
27	2×5	
28	2×5	
29	1×10	
30	1×10	
31	0.5×9	調査溝、弥生土器
32	1×3	
33	1×10	
34	1×10	
O区	400 (m)	ピット、建物跡?、弥生土器

試掘査一覧表



O区 調査風景

⑩ 原の辻遺跡

所在地 壱岐郡芦辺町深江鶴亀触

調査原因 学術調査

調査期間 平6.9.19～平6.11.26

報告書 平成7年3月刊行

調査主体 芦辺町教育委員会

調査面積 2,005m²

処置 調査後保存

立地

遺跡は、壱岐島の南東、芦辺町と石田町の町境に位置し、島内最長の櫛鉢川が形成した沖積地のなかに舌状に突出した標高8～18mほどの低い台地と、標高5mほどの現水田面に立地している。今回の調査地点は、舌状に突出した台地上、標高約13mの地点である。

調査

平成5年度に実施された、県営櫛鉢川流域総合整備事業に伴う調査の結果、この遺跡が大規模な環濠集落であることが明らかになった。そのため、国指定を受ける基礎資料とするために国庫補助で範囲確認調査を行った。

調査は、台地上に、東西約230mにわたってトレンチを設定し実施した。

遺構としては、弥生時代前期末から古墳時代初頭にかけての住居跡13棟、貯蔵穴2基、土坑7基、200個をこえる柱穴群が確認された。

遺物は、卜占に使用されたイノシシの肩甲骨、縁が山形をなす青銅鏡片（復元径8.2cm）1点、銅鏡7点、鐵鏃・鐵鎌等の金属器、骨剣やイノシシ等の獸魚骨類、紡錘車・石鏃・石錘・石鑿等の石製品、装身具で大型管玉1点の他に31点のガラス小玉等が出土した。

今回検出した遺構については、埋め戻しを行い保存している。



原の辻遺跡調査位置図〔芦辺〕(1/25,000)



調査区図

【調査担当：副島・町田・山下・川口・石尾・松永】(文責：石尾)

⑪ はる つじ 原の辻遺跡

所在地 壱岐都芦辺町深江鶴亀触宇川原畠外

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 河川改修工事

調査面積 4,000m²

調査期間 平6. 11. 2～平7. 3. 31

処置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

原の辻遺跡は壱岐島の南東部に位置し、通称深江田原と呼ばれる平野に突き出した舌状台地とその周辺部に立地する。遺跡の北側を東西に流れる幡鉢川は、昭和14年に改修工事が行われており、それ以前はかなり曲がりくねっていたことが古い地図によって確認できる。

調査

調査は、幡鉢川中小河川改修工事に伴うもので、平成5年度に芦辺町教育委員会によって範囲確認調査が実施された。その結果、調査区全体に遺物包含層が確認され、平成6年度から緊急発掘調査を実施することとなった。今回は、津合橋の東側河川敷4,000m²について、全面的調査を実施した。調査の結果、遺構は確認されなかつたが、自然流路と思われる弥生時代の溝を検出した。この溝の中から弥生中期の土器、石鎌、石錘、木製品などが出土している。

まとめ

今回の調査では、平成5年度に確認された外濠の延長部分の発見が期待されたが、人為的な掘削を施したいわゆる環濠遺構は認められなかつた。今回検出された弥生時代の溝は、その形状や覆土の堆積状況などから、旧河道であったことが推測される。外濠が水濠であったとすれば、この河道に取り付いていた可能性もある。



原の辻遺跡調査位置図〔芦辺〕(1/25,000)



調査区位置図 (1/5,000)

【調査担当：副島・町田・山下・川口・石尾】(文責：山下)

⑫ 壱岐國分寺跡

所在地 壱岐都芦辺町国分本村触

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 道路建設

調査面積 15m²

調査期間 平6. 6. 14～平6. 6. 23

処置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

遺跡は、壱岐島のほぼ中央、芦辺町に位置し、標高約100mの台地上に立地している。古くから瓦片や礎石等により壱岐國分寺跡として周知されていた。昭和49年「壱岐國分寺跡」の名称で長崎県史跡に指定されている。

調査

調査は、県道湯ノ本芦辺線道路改良工事に伴って、工事区域内に 2m × 5m と 1m × 5m の試掘坑を各 1箇所設定し実施した。

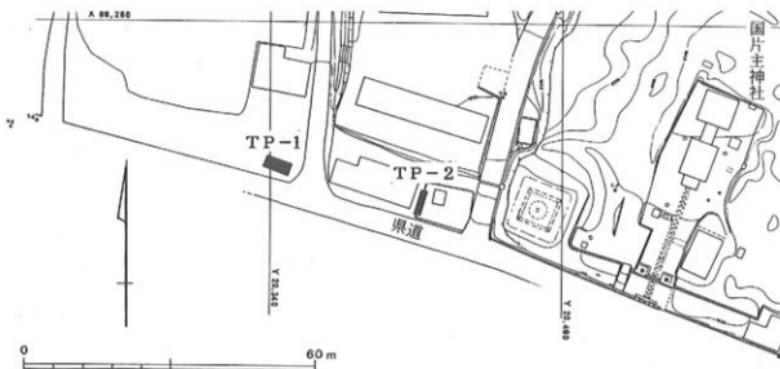
土層は、TP. 1 区は、表土の下に、第2層として黄褐色土層が確認され、第3層は赤褐色粘質風化礫層（地山）であった。TP. 2 区は、表土の下は赤褐色粘質風化礫層（地山）であった。遺構は、認められなかった。

遺物は、表土中から数点の土器片、陶磁器片が出土した。

【調査担当：町田・石尾】（文責：石尾）



壱岐國分寺跡位置図〔湯本〕(1/25,000)



試掘坑配置図

い　き　し　きょかん
⑬ 壱岐氏居館跡

所 在 地 壱岐郡芦辺町国分東触766-1

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 道路建設及び社務所建設

調査面積 296m²

調査期間 平6. 6. 14～平6. 8. 19

処置 調査後工事

報 告 書 未刊行

立地

居館跡は、壱岐国分寺に隣接して在り、壱岐島中央部の標高100～104mに位置する。

調査

調査は、県道拡幅工事及び工事に伴う国片主神社移転計画によって削平を受ける地区について、平成6年6月14日～6月23日に試掘調査、平成6年7月19日～8月19日に本調査をそれぞれ行った。

試掘調査で、石垣・糸切り底の土師器皿集中箇所・土坑・柱穴等の遺構を確認し、遺跡保護の協議を行った。

その結果、設計変更できない部分については道路部分の調査を平成7年度とし、今回は社務所・鳥居等の設置場所について本調査を実施した。

主な遺構は、中世の土坑・溝・柱穴群を検出した。遺物は、2層から寛永通宝・長崎貿易銭等の貨幣や「かわらけ」・陶磁器片等の出土があり、3～4層に土師器の皿・同安窯系の皿が出土し、パンコンテナー約16箱分であった。

まとめ

遺跡は、壱岐氏居館跡として想定されている地点であったが、奈良時代に属する遺物は須恵器・瓦片数点が出土するに留まり、包含層及び遺構を確認することはできなかった。今回確認されたのは、2層が江戸時代、3層が鎌倉・室町時代の祭祀用の土師器等を多量に出土し、遺物と関連した遺構を検出したことであった。このような状況から、調査区は中・近世の祭祀跡であったと考えられる。

〔調査担当：町田・石尾〕（文責：町田）



壱岐氏居館跡位置図〔湯本〕(1/25,000)



遺構検出全景

こうばる
⑭ 興原遺跡

所 在 地 壱岐郡石田町興触字古川

調査原因 農道整備

調査期間 平6. 5. 17~平6. 5. 24

報 告 書 未刊行

調査主体 石田町文化財保護協会

調査面積 48m²

處 置 調査後工事

立 地

興原遺跡は、壱岐島の南東部に位置する平野「深江田原」（ふかえたばる）に突き出た舌状台地上に広がっている。遺跡の南側には幡鉾川が流れ、約2キロ下流の内海に注いでいる。地名である興が、国府（こう）に通じることや、付近に印鑰神社とも呼ばれる興神社と總社が存在することから、律令時代の国府の有力な推定地とされている。

調 査

調査は、遺跡内を走る農道女池線の整備事業に伴うもので、拡幅が予定されている地点に13箇所の試掘坑を設定して行った。

調査の結果、数箇所の試掘坑で近世から現代にかけてのものと考えられる浅い性格不明の溝が確認された。

調査地付近の基本的な土層は、第1層が褐色の表土で数箇所から須恵器や中世の青磁が数点出土している。これらは、攪乱による流れ込みと考えられる。第2層は、暗赤褐色土層でやや粘質である。第3層は、黄灰色の地山であった。

まとめ

調査の結果、特定の時代を示す遺構・遺物包含層は確認されなかった。調査した地点の現状は山林や削平された畠などがほとんどであった。しかし、調査地の近くでは須恵器や貿易陶磁器が表採できる場所が多く、この付近にかつて人々が生活を営んでいたことが推測される。



興原遺跡位置図〔湯本〕(1/25,000)



遺跡遠景

【調査担当：山下・川口】(文責：川口)

⑯ 宇久松原遺跡（カルテ）

所在地 北松浦郡宇久町平郷字松原

調査原因 学術調査

調査期間 平6.7.25~平6.8.3

報告書 平成7年度刊行予定

調査主体 長崎県教育委員会

調査面積 44m²

位置 調査後埋め戻し

立地

本遺跡は宇久島の南東部にあり、島の玄関口でもある平港一帯に形成された標高6m前後の古砂丘上に立地する。遺跡は平郷にある神島神社を中心とした範囲に広がっていると推測され、これまで多くの弥生時代墳墓が見つかっている。

調査

遺跡の発見は明治5年にさかのぼる。支石墓1基が発見され、内部から人骨と剣が出土したという。昭和43年と52年には本格的に発掘調査も行われ、支石墓や甕棺墓を含む弥生前期～後期の埋葬遺構が多数確認されている。その後も周囲の宅地化に伴う各種の工事等で、遺構・遺物の出土が報告されている。

調査では神社周辺が民家の密集地で試掘坑の設定が困難であったため、遺跡の中心地から離れた場所の家庭菜園や休憩地から11か所を選定して実施した。調査の結果、第1～4と第9～11試掘坑からは近世の陶磁器片が、第7試掘坑からは縄文晩期の土器1点が、第11試掘坑からは中世の遺物10数点が出土した。しかしながら、弥生時代の遺構・遺物は全く確認することはできなかった。

まとめ

今回の調査では主たる目的であった弥生時代の埋葬遺構を把握できず、遺跡範囲を特定するには至らなかった。結果的に遺跡は従来の見解通り、神島神社とその周辺のごく限られた範囲に限定されるものと思われる。唯一、縄文晩期の土器片の出土により、弥生前期と考えられていた遺跡の形成時期が若干さかのぼることとなったのが新しい成果といえよう。



宇久松原遺跡位置図〔宇久島〕(1/25,000)



遺跡遠景

〔調査担当：本田・高原〕〔文責：本田〕

うくまつばら
⑯ 宇久松原遺跡

所在 地 北松浦郡宇久町平郷字松原

調査原因 個人住宅造成

調査期間 平7. 3. 27~3. 31

報告 書 未刊行

調査主体 宇久町教育委員会

調査面積 28m²

處 置 平成 8 年度本調査

立地

宇久松原遺跡は、五島列島最北端の宇久島に所在する。遺跡は、標高 6 m 前後の砂丘上で、町の中央に鎮座する神島神社を中心に営まれている。1960年代までは砂丘が広がる海岸が前面に形成されていたが、現在は埋め立てられ、見る影もない。

調査に至る経緯

遺跡の調査はこれまでに数回調査されている。
昭和42年の別府大学と長崎大学医学部による分

布調査の成果に基づき、翌43年には両大学の合同調査が実施され、神島神社境内と西側の民家の庭より支石墓、甕棺、石棺等12基検出し、人骨も出土するなど大きな成果を得た。

また、昭和52年には神島神社改築工事に伴って県文化課が調査を担当し、甕棺、石棺等27基が検出され、人骨も出土している。2回の調査の結果、時期は弥生時代前期から中期にかけてであることが判明した。

その後、平成6年、県文化課による遺跡カルテ事業が実施された。神社を中心に広い範囲に試掘坑が設定されたが、埋葬遺構を確認するには至っていない。しかし、中世から近世（14世紀～15世紀）の遺物と、縄文晩期の土器1点が出土して、これまでの時期の上限と下限について新たな成果が得られた。

今回の調査は、神社北側の空き地に貝殻が散布しており、貝塚の存在と埋葬遺構の広がりが考えられるため、開発に先立って調査を実施したものである。

調査

調査は平郷2381・2382番地約500m²にA～Eの試掘坑を設定した。TP.Aでは近世の搅乱層が主体を占め、近世の陶磁器と礫を多く含み、鯨骨片も出土。III層からは板付II式壺口縁と胴部片が若干出土した。TP.BからはIV層に支石墓2基を検出した。なお黒曜石片も數点出土。TP.C・DではIV層から晩期土器と黒曜石剝片が数点出土。TP.Eからは何も確認されなかった。

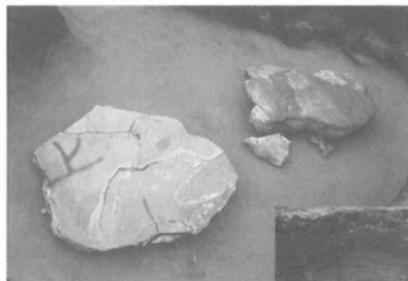
調査結果は、当初予想された貝塚の存在は認められず、近世の貝殻が散布していた程度であった。

またTP.Bから支石墓2基が良好な状態で検出されたが、内部構造や詳細な記録については平成8年度の本調査に期待したい。なお時期的には遺物から晩期終末頃が考えられ、これまで弥生時代前期頃までと考えられた時期も若干遡ることになる。

なお周辺には支石墓の上石と考えられるものが数箇所確認されており、支石墓の基數が増える可能性もある。

【調査担当：安楽】（文責：安楽）

宇久松原遺跡調査区図



宇久松原遺跡第1号・2号支石墓検出状況

⑯ 頭ヶ島白浜遺跡

所在 地 南松浦郡有川町頭ヶ島

調査原因 アワビ養殖場建設

調査期間 平7. 2. 14～2. 18

報告 書 平成8年度刊行予定

調査主体 有川町教育委員会

調査面積 44m²

處 置 本調査

立地

有川町は五島列島の中通島中央部に位置し、町内には浜郷遺跡や立石遺跡など県の重要遺跡に含まれているものもある。本遺跡は、町の中央部から東端に位置する頭ヶ島に所在する。現在は橋で結ばれ、島の頂上部には上五島空港が設置されている。島のほとんどは山林で占められ、北の海岸部にわずかばかりの平地が見られる。遺跡は白浜の砂丘に広がるが、中央に注ぐ小河川によって東西に二分される。東側には墓地が営まれ、ここからは縄文時代の遺物が表面採集される。西側は南に向かって高くなり、民家が建てられている。この集落の一一番奥には県指定文化財の頭ヶ島教会が建っている。



頭ヶ島白浜遺跡位置図【頭ヶ島】(1/25,000)

調査

昭和42年、長崎大学医学部、別府大学による調査が行われ、縄文時代前期の轟式、曾畠式土器をはじめ中期、後期、晩期までの土器が出土している。また東側砂丘では戦後、海岸の砂を採取中、人骨が20体ほど出土したと言われるが、時期的なものについては不明である。西側砂丘は傾斜が強くなっているが、海岸部は平坦になっている。10年ほど前に歩道を新設した際に、人骨が2体出土している。

今回は予定地内に11箇所の試掘坑を地形に応じ任意に設定した。平坦部に1～5区、傾斜面に6～9区、頂上部に10、11区を設定した。平坦部の2・4区では縄文時代前期の遺物が認められた。9区からは第3層の暗褐色砂質土層から縄文時代後期の粗製無文土器が多く出土した。この区からは2m掘り下げても粘土層に達せず砂だけの層である。なお10年前に人骨2体が出土したといわれる3区と4区の傾斜面を掘ったところ、保存の良好な屈葬人骨1体が出土した。この人骨の年代は不明であるが、周囲にはまだ埋葬されていると予想される。

まとめ

調査により縄文時代前期と後期を中心とする遺物が確認され、砂丘の比高差も7mに達していることが予想され、人骨の出土があるため工事にあたっては事前の調査が必要と判断された。

[調査担当: 安楽] (文責: 安楽)

⑯ 浜郷遺跡

所在 地 南松浦郡有川町有川郷字浜村

調査主 体 長崎県教育庁文化課

調査原因 県内重要遺跡範囲開確認事業

調査面積 24m²

調査期間 平6. 7. 25～平6. 8. 3

処置 現状保存

報告書 平成7年度刊行予定

立地

遺跡は、中通島のほぼ中央部に位置する有川湾に面した平申鼻の東側に形成された標高5～6mの砂丘上に位置する。遺跡の中心は2箇所で、入江の南より「浜遺跡」「浜第2遺跡」として周知されている。

調査

今回の調査は、6箇所の試掘坑(TP)を設定した。浜第2遺跡の南側から西側にかけてTP.1～TP.5、浜郷遺跡の南東部にTP.6を設定した。

全試掘坑を通じて、弥生時代の墳墓遺構や遺物は検出できなかった。TP.1からは寛永通宝など8枚の銭貨や18世紀前半とみられる煙管、その他陶磁器類が出土した。TP.4では近代と近世の整地層ならびに黄色の砂質土層からなる埋土が確認された。遺物としては、近世の整地層より、胞衣壺が3個まとまって出土した。

まとめ

今回の調査の結果、浜郷の弥生遺跡が極めて限定された範囲であることが明らかとなった。旧地形を推察するかぎり、遺跡台帳等で



浜郷遺跡位置図 [有川] (1/25,000)



浜郷遺跡試掘坑配置図 (1/2,000)

周知されている範囲に限定されるものと思われる。

[調査担当: 古門・寺田] (文責: 古門)

⑯ まがりこぼ
曲古墓群

所 在 地 南松浦郡若松町日島郷曲

調査原因 遺跡整備

調査期間 平6. 8. 29~9. 16

報 告 書 未刊行

調査主体 若松町教育委員会

調査面積 500m²

處 置 保存整備

立地

五島列島若松島の北西部には有福島と日島が位置し、現在は陸域化されている。遺跡は日島の南西部に嘴状に延びる標高2m~6mの礫丘上に営まれている墓地群である。北側は外海で荒波が打ち寄せ、南側は波静かな内海であり景観も良く、西海国立公園の一翼を担っている。

調査

調査は、平成5年度から復原整備の目的で進められ、今年度は町道の南側が対象地区である。

古墓群は密度が高く、中世の五輪塔、宝篋印塔、宝塔、中・近世板碑、積石墓など多数が残存している。使用された石材は凝灰岩、花こう岩、緑色片岩などである。

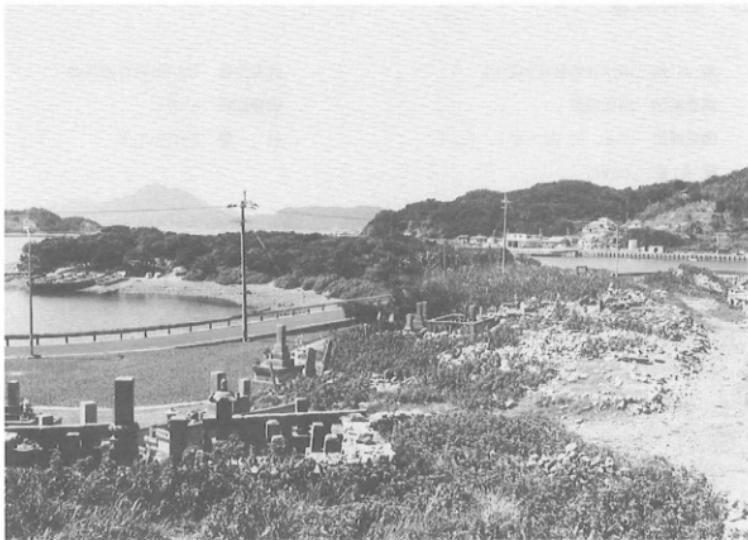
調査の内容は草木除去等の清掃作業から、地形測量、墓域南側の現状平面図作成、一部発掘による精査、遺構の復元作業などである。半島中央部に位置する5つの五輪塔のうち、4号と5号について精査した。その結果、4号では地表から70cmの棺床に白い円礫を敷き詰め、同レベルから同安窓系青磁片と口縁部の袖をはぎ取った、いわゆる口禿の白磁片、土師質土器片が出土した。また木棺に使われていたと思われる鉄釘も若干出土した。さらに1号五輪塔西側には表面に瓦質の火鉢がのぞき、全部を取り上げる。かなり破損していたが、復原してみると2箇体の大形のものになった。おそらく藏骨器として利用されていたと考えられる。時代は出土品から推測して14世紀頃ではないかと考えられる。その他の中世の遺物と考えられるものに和鏡の素文鏡が一面出土している。

町道に近い部分からは弥生時代中期の土器片がまとまって出土したが、おそらく同一個体で甕棺と考えられるが、それ以上の関連したものは出土しなかった。しかし五輪塔棺床面からさらに下層では、古墳時代の土器片や須恵器片が出土したことから、この砂嘴が長い期間利用されたことが窺われた。

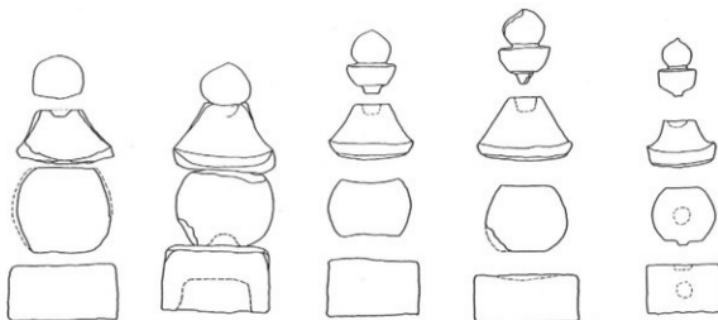
まとめ

これまでの調査において、なぜこんなに小さく地理的にも不利な島にこれだけの石塔群が建立されたのかという問題が提示された。今後はその背景についても文献などで空白を埋めていかなければならない。また、風化の激しい石塔群の今後の風化防止対策が急がれるところである。

[調査担当: 安楽] (文責: 安楽)



曲古墓群全景(整備前)



曲古墓群町道南側所在の五輪塔実測図($S = 1/20$)

よりがみ
㉚ 寄神貝塚

所 在 地 南松浦郡岐宿町岐宿

調査原因 園場整備

調査期間 平6.6.20～平7.7.1

報 告 書 未刊行

調査主体 岐宿町教育委員会

調査面積 84m²

處 置 調査後工事

立 地

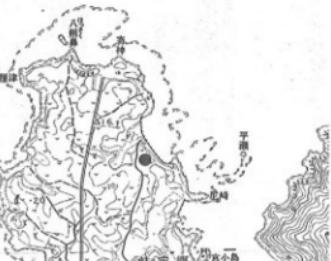
本遺跡は、福江島の北部に所在する岐宿町寄宿郷より、北に半島状にのびた溶岩台地の右岸に位置する。貝塚は標高14m～15mの台地上に形成されており、周辺部は北東の海食崖を除き畑地ないしは水田である。南東側は大きく傾斜し段差をもつ畑地となり、畑斜面には厚さ20cmの純貝層がみられる。

調 査

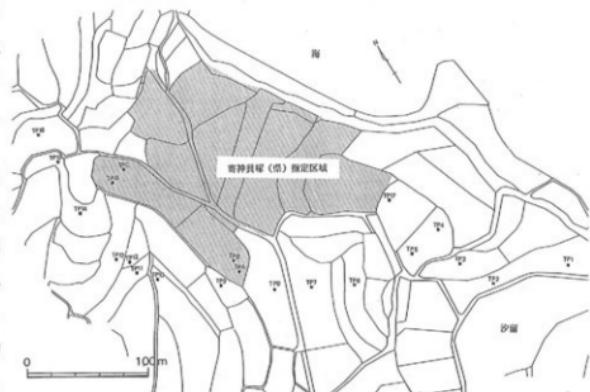
今回の調査は、道路管理の計画線上にTP(試掘坑)を設けておこな

った。調査の結果、性
格不明のビット(小穴)
がTP.Aで3基、TP.
Bで1基検出された。

TP.Aでは耕作土下の
暗茶褐色土層、TP.B
では破碎貝層下の暗茶
褐色土層に掘り込まれ
ている。遺構はこれら
のビットのみで、遺物
はすべての試掘坑から
出土したものをあわせ



寄神貝塚位置図〔岐宿〕(1/25,000)



寄神貝塚試掘坑配置図

ても10数点にすぎない。遺物包含層や原位置を保った貝層は確認できなかった。

まとめ

今回の調査の結果、管理道路の敷設予定地には遺跡の広がりはみられず、あらたな遺跡の発見もなかつた。

[調査担当：古門・本田] (文責：古門)

② 津吉遺跡

所在地 平戸市津吉町字大坪783-第2

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 河川改修工事

調査面積 32m²

調査期間 平6.11.15～平6.11.22

処置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

平戸は、険しい山が著しく海岸に迫る、リアス式海岸の美しい島である。そのためこの島では、深く入り組んだ内湾の後背の低地や、それに続く台地部分や小河川の扇状地など少ない平地に、各時代の遺跡が集中して存在している。

今回調査した区域は、平戸市南部の古田漁港の奥、古田川流域の標高約2m程のところであった。

調査

本遺跡は、昭和57年に水田取付路工事中に、甕棺墓が発見されたことがきっかけとなって周知されている。その後河川の改修や水田整備などの開発にさきだって、範囲確認調査が昭和58年～60年度にかけて行われている。その報告書によると今回調査した大坪地区からは、弥生時代の甕棺墓をはじめ、土坑墓、住居跡、貯蔵穴を検出し、当時の食料であるカシ・シイなどの堅果類、シカ、イノシシなどの動物遺体が出土している。

以上の経緯から、今回の古田川の河川改修工事にさきだって試掘調査を実施し、範囲を確認することとなった。

調査は、標高約2mの古田川に沿った水田および荒地に、2m×2mの試掘坑を8箇所設定して行った。

まとめ

調査の結果遺物は、1層（水田耕作土）～2層（水田床土）および3層；黒灰褐色粘質土上部から中・近世～現代の陶磁器破片、摩耗した弥生土器片、黒曜石片、木片などが混じりあった状態で出土した。しかしそれより下層では全く遺物が出土せず、遺構も検出しなかった。このことは河川の氾濫や水田開拓の結果であると思われる。

よって今回の河川改修工事の実施にあたっては、支障はないとの判断を下した。

【調査担当：本田・松尾】（文責：松尾）

㉒ 女亀遺跡

所 在 地 南松浦郡富江町土取郷

調査主体 富江町文化財保護協会

調査原因 煙地帯総合整備事業（農業関連）

調査面積 28m²

調査期間 平6.5.23～平6.5.27

処置 工事立会、新規遺跡発見

報 告 書 未刊行

立地

女亀遺跡は、福江島の南部に突き出た低平な溶岩台地である富江半島の東端に位置する。戦前から地元郷土史家らによって黒曜石製の石鏃や石頭が多く採集され、縄文時代の主要な遺跡として知られていた。昭和39年には、同志社大学の坂詰仲男教授らによって発掘調査が行われたが、坂詰氏が急逝されたためにその調査報告書は刊行されていない。



女亀遺跡位置図 [富江] (1/25,000)

調査

今回の調査は、当該畠総事業が計画された地域の一部が女亀遺跡の周辺に位置するため、県文化課によって分布調査を平成5年12月13日に行ったところ、遺物の散布が認められたため、今回の範囲確認調査を実施した。調査は、排水溝工事予定地にTP.1～7の7箇所の調査坑を設定して28m²を発掘調査した。

調査の結果、TP.2とTP.3で遺物包含層と推測される黄褐色粘質土層(2A層)から黒曜石剝片と破片が数点出土したが、他の調査坑では烟の耕作に伴う搅乱された土層から若干遺物が出土したにすぎない。2A層出土遺物は、旧石器時代の可能性をもち、当該工事対象地域では希薄な分布状況を示すが、周辺に濃密な分布地点が存在することも考えられる。

また、工事予定地の北側に弥生土器や黒曜石片、破碎貝が散布している地域があり、縄文時代の女亀遺跡とは別に、新規遺跡として把握すべきと思われる。

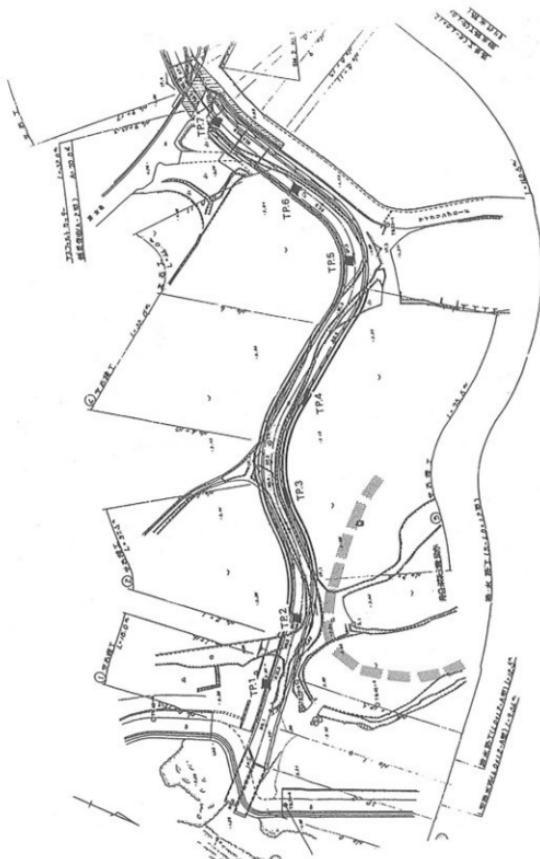
まとめ

今回調査によって、当該工事対象地区では良好な遺物包含状況は認められなかったので、事前に本調査を行う必要はないが、TP.2とTP.3付近については、町教育委員会によって工事立会を実施すべきと考えられる。

今回新たに発見された遺物の分布範囲については、新規遺跡（船森遺跡）として捉えられ、文化財保護法第57条の6に基づく遺跡発見届を提出していただきたい。また、この遺跡が工事等にかかる場合には、事前に協議をお願いしたい。

[調査担当：宮崎] (文責：宮崎)

女童迷路警区示意图 (11.00)



かみわき
㉓ 神脇遺跡

所在 地 北松浦郡鷹島町神崎免

調査主体 鷹島町教育委員会

調査原因 土地区画整理事業（農業関連）

調査面積 40m²

調査期間 平6. 6. 27～平6. 7. 14

処置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

鷹島は、伊万里湾の湾口に浮かぶ南北約8km、東西約5kmの規模をもつ島で蒙古襲来の弘安4年（1281）の「弘安の役」で暴風により数多くの軍船が沈没した元寇の島として知られている。島の地勢は基盤の第三紀層の上を玄武岩が覆ったなだらかな丘陵地形をなしている。

神脇遺跡は、島中央のやや東側に位置する標高60～70mの丘陵から狭い谷間に立地し、ナイフ形石器や石鏃が採集され、旧石器時代～縄文時代にかけての遺跡として推測された。

調査

今回の調査は、鷹島地区の土地区画整理事業にかかる神脇遺跡と小浦遺跡の二つの遺跡が範囲確認調査を、平成6年度の国庫補助事業として町教育委員会が主体となって実施したものである。現地は、三分の一程がタバコ畑とミカン園になっている他は一面草木が生い茂った荒地になっている。調査は、2×2m調査坑を10箇所設定して、40m²の範囲確認調査を行った。調査の結果、TP.2・6・7の灰褐色粘質土層（2c層）からそれぞれ1点、2点、1点の黒曜石剝片が出土したが、他の調査坑では遺物の出土は無く、特にミカン園の地域は地山まで攪乱されている状況が確認された。また、ミカン園南側の空地でスクレイバー1点と黒曜石剝片1点が採集され、もともとは遺跡が存在していたが、当該工事区域では攪乱を受けてしまったことが推測される。

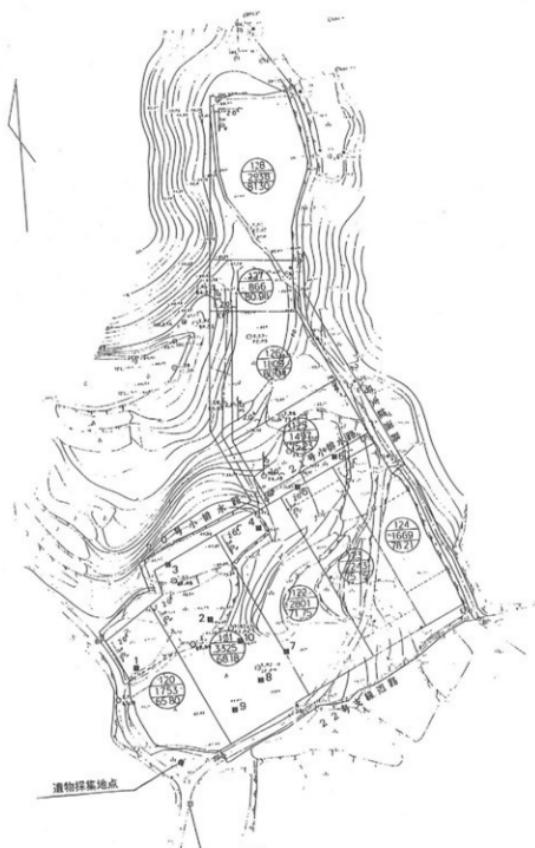
まとめ

調査の結果、当該工事区域においては、良好な遺物包含状況や構造の存在は認められず、本調査を実施する必要はないと考えられる。

[調査担当：宮崎] (文責：宮崎)



神脇遺跡位置図〔高串〕(1/25,000)



神賀遺跡調査区図 (1/2,000)

② 小浦遺跡

所在地 北松浦郡鷹島町船唐津免

調査原因 土地区画整理事業

調査期間 平6. 6. 27~平6. 7. 14

報告書 未刊行

調査主体 鷹島町教育委員会

調査面積 52m²

処置 調査後工事、一部工事立会

立地

鷹島は、伊万里湾の湾口に浮かぶ南北約8km、東西約5kmの規模をもつ島で、蒙古襲来の弘安4年（1281）の「弘安の役」で暴風により数多くの軍船が沈没した元寇の島として知られている。島の地勢は、基盤の第三紀層の上を玄武岩が覆ったなだらかな丘陵地形をなしている。

小浦遺跡は、島南部の船唐津の入江を見下ろす標高30~40mの緩傾斜面に立地し、ナイフ形石器や磨製石斧が採集され、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡として推測されていた。

調査

今回の調査は、鷹島地区の土地区画整理事業にかかる神脇遺跡と小浦遺跡の二つの遺跡の範囲確認調査を、平成6年度の国庫補助事業として町教育委員会が主体となって実施したものである。現地は、一部が畠地として利用されている以外は、草むらになっている。調査は、TP.A~Mの2×2mの調査坑を13箇所設定して52m²の範囲確認調査を行った。調査の結果、T.P.Aの淡赤茶褐色粘質土層（2c層）から黒曜石剝片1点、T.P.Bの黄茶褐色粘質土層（2b層）から黒曜石剝片1点、T.P.Eの2c層からナイフ形石器1点、小さな黒曜石原石1点が出土した。

まとめ

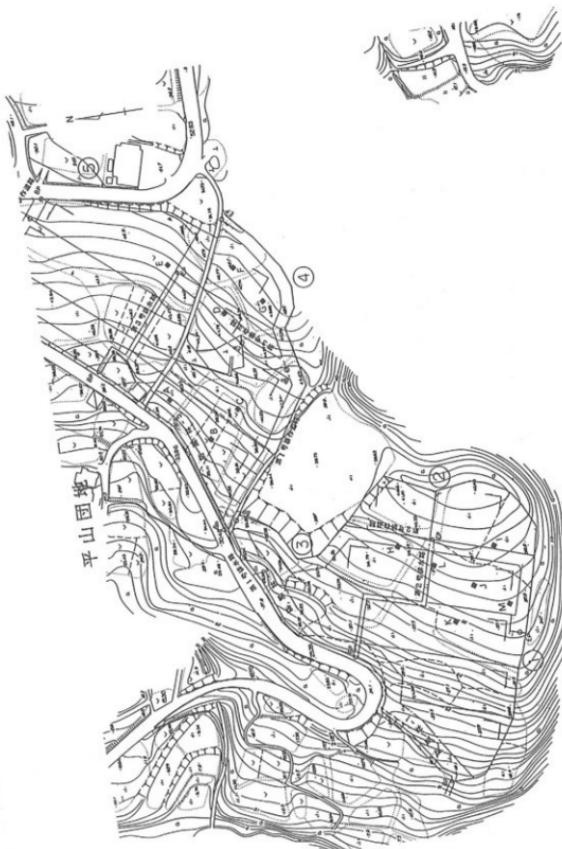
調査の結果、良好な遺物包含状況や遺構の検出が見られなかったので、本調査を実施する必要はないと考えられる。したがって、工事を行うことは支障ないが、T.P.A・B・E付近については工事の際に町教育委員会による工事立会を実施していただきたい。

小浦遺跡位置図〔志佐〕(1/25,000)



〔調査担当：宮崎〕（文責：宮崎）

小漁塗地調查区域圖 (1/100)



たかしまかいてい
㉕ 鷹島海底遺跡

所在地 北松浦郡鷹島町神崎免地先公有水面 調査主体 鷹島町教育委員会
調査原因 防波堤建設工事 調査面積 1,200m²
調査期間 平6. 10. 14～平6. 12. 12(浚渫・潜水調査) 处置 調査後工事着工
報告書 平成7年度刊行予定

立地

鷹島南岸神崎港から沖合150mの地点で、現水深—15m～—20mにかけての傾斜地。

調査

調査にあたっては、あらかじめ調査予定区域について事前の海底地層探査を実施し、その結果異常反応があった地点を中心として慎重に浚渫することから着手した。

浚渫の結果、海底下1m、水深—21～—22mの地点で碇石と木片の発見があり、その地点を中心として海底に10×10mのグリッドを6か所設定した後エアーリフトによる潜水調査に切り替えた。

海底下の視界は良好な時で4m、作業によって濁り始めると0m近くなる。作業は2名のダイバーが一組となってエアーリフトを作動させるが、その時間は一回につき40分程度である。

出土遺物は調査員が原位置で確認し、平面実測図、断面図、写真、VTR撮影で記録した後引き揚げた。

【出土遺物】

木製碇3点(赤檜製)、碇石17点、木片50点、網状遺物2点、石製品2点 計74点
まとめ

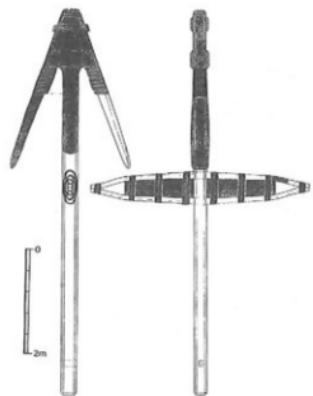
鷹島海底遺跡からは、これまで計14個の碇石が出土していたが、博多や平戸等で発見されている碇石とは形や大きさが異なっており、構造上の謎であった。今回の調査では構造が完全に把握できる木製碇が3点と碇石が同一の層から出土したことで、2個の碇石をセットで使用するという珍しい構造が判明することになった。これらの碇は、出土状況や歴史的事実からも元寇関係資料と断定してさしつかえないものであり、その結果博多等出土の碇石は貿易船用のものであった可能性が高くなったのに対し、鷹島タイプはあるいは日本進攻という非常時に大量に作られた可能性が推定される。

現在中世の船としては中国泉州・寧波、韓国新安などで発見されているが、全容が判る木製碇の発見はアジアで初例である。

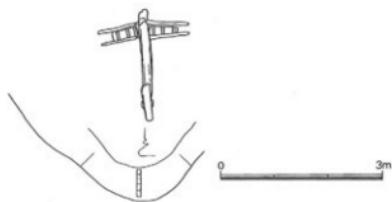
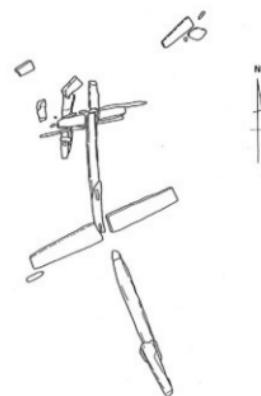


鷹島海底遺跡調査位置図〔高串〕(1/25,000)

〔調査担当：田川・高野〕(文責：高野)



木製桟復原図(小川光彦作成)



桟出土図



海底下の木製桟

②6 しもかやば
下茅場遺跡

所在 地 西彼杵郡西彼町平山郷字忠五郎 353外

調査原因 広域農道建設工事

調査期間 平6. 11. 28～平6. 12. 20

報告 書 未刊行

調査主体 西彼町教育委員会

調査面積 280m²

処置 遺跡にかかる区域は保存

立地

当該地は、綿打川の上流を形成する二つの小河川に挟まれた標高200m程の山林に位置する。

調査

道路新設予定路線に沿った現地踏査によって、数か所において石鍋片と滑石塊の露頭を発見した。その部分を中心として試掘調査を行った結果、以下の7か所において石鍋製作跡を確認した。

A (露頭) …長さ7.4m、高さ2.6～3mで

露頭面に石鍋採掘痕が顕著である。

B (岩陰状) …長さ7.4m、高さ7.7m、奥行き2.2mの岩陰構造で、壁面に石鍋採掘痕が顕著である。

C (岩塊) …長さ3.8m、高さ3.3m、厚さ1.5mの滑石岩塊で、表面に石鍋採掘痕が顕著。

D (岩陰状) …長さ5.9m、高さ2.3mの岩陰構造で壁面に石鍋採掘痕が顕著である。落ち葉等による埋土によって遺構が半分程埋没している。

E (洞窟) …洞窟状に掘削を続けた構造で、内部の長さ12.6m、高さ1m、間口の幅は1.5mである。壁面や天井部分に石鍋採掘痕が顕著であるが、内部にはズリが厚く堆積しており、全容は不明である。

F (洞窟状) …間口3m、高さ1.4mの洞窟状構造であるが、内部については未堀であり、規模等は不明である。

G (岩塊) …長さ3m、高さ1.7mの滑石の岩塊表面に石鍋採掘痕が顕著である。

まとめ

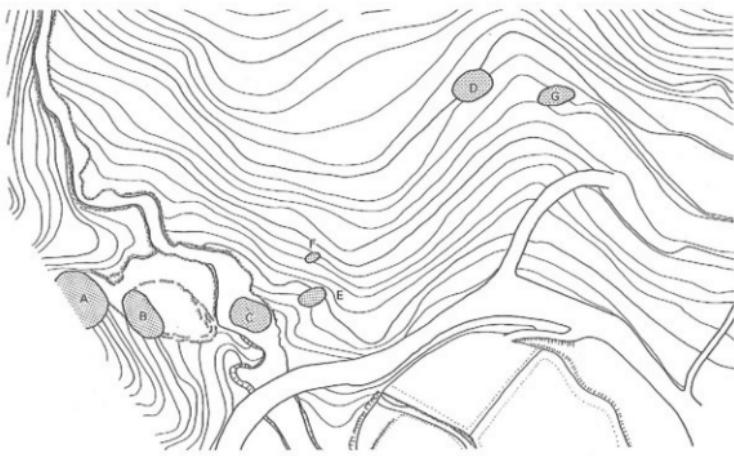
石鍋製作跡は、現在西彼半島を中心に70か所程度が確認されているが、製作工程が判明する大規模な遺跡は大瀬戸町ホゲット遺跡（国指定史跡）等を除くとその数は少ない。

下茅場遺跡は、狭い範囲に7か所の遺構があり、その内A遺構は採掘痕が極めて顕著であることやE遺構の如く洞窟状に採掘している例は非常に珍しく、製作工程を知ることができる資料として重要である。

【調査担当：高野】（文責：高野）



下茅場遺跡位置図〔板浦〕(1/25,000)



石鍋製作跡



(A遺構)



(E遺構)

㉗ 小田貝塚

所在地 西彼杵郡大瀬戸町雪浦上郷672

調査主体 大瀬戸町教育委員会

調査原因 宅地造成

調査面積 40m²

調査期日 平6.5.12~5.20、平6.11.7~11.17 处置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

本遺跡は雪浦川支流の河通川と小田川の合流域を望む標高7~14mの舌状丘陵に立地する。雪浦川河口までは直線距離にして約1.5kmで、満潮時は遺跡近くの曙橋までボラなどが遡上する。本遺跡から小田川をはさんで200m北の山頂(標高70m)には中世の在地領主田川氏の居城といわれる鳥越城がある。

調査

当該遺跡は、1924(大正13)年長崎考古学会によって発掘調査が行われ、弥生時代の貝塚として周知されている。その時の発掘記録によれば、石鏃・石斧・土器・人骨などが出土している。

5月の範囲確認調査では、試掘坑を調査対象地に8か所設定した。土層は第1層の耕作土の下に第2層として黄褐色土層が存在し、第3層は玄武岩ないしは安山岩を多く含む地山となっている。

TP.1~TP.5には、貝塚が存在せず出土遺物はなかった。TP.6でも貝塚は存在せず、旧石器時代の黒曜石製の石核が出土した。TP.7・8でも貝塚は存在せず、出土遺物はなかった。

5月の調査の継続として11月に範囲確認調査を実施した。この際、中世の貝塚を発見した。貝層中からは人骨一体が出土した。人骨は頭部を東に向けて、ほぼ原位置を保った状態で出土しており、長崎大学医学部解剖学第二教室の調査によって被葬者は熟年女性であることが判明した。遺物としては土師質の片口鉢片、高台付の椀、火鉢などが出土した。

まとめ

今回の調査では、これまで不明瞭であった小田貝塚の様相が一部明らかとなった。しかし從来、弥生時代の貝塚と考えられていた小田貝塚であるが、今回の調査で貝塚から出土した遺物は、中世を中心としたものであったため、今回の調査区とは別の場所に弥生時代の貝塚があった可能性が考えられる。



小田貝塚位置図〔板浦〕(1/25,000)

【調査担当：安楽・村川・古門】(文責：古門)

ながよどうざき
②8 長与堂崎遺跡

所 在 地 西彼杵郡長与町岡郷

調査原因 農道改良工事

調査期間 平6. 6. 29～平6. 7. 13

報告書 福田一志ほか 1994 『長与堂崎遺跡』

調査主体 長与町教育委員会

調査面積 60m²

処置 調査後工事

長与町教育委員会

立地

遺跡は、長与町北部の大村湾に突き出た標高10～30mの半島である堂崎ノ鼻に立地し、現在はミカン畠として利用されている所である。古くから遺物の採集ができることが知られていたが、昭和43・44年の発掘調査で後期旧石器時代を主体とする遺跡であることが確認された。

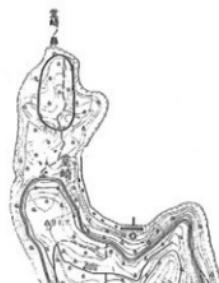
調査

今回の調査は、遺跡のほぼ中央を縦断する堂崎線農道改良工事に伴うもので、工事に先立つ5月11日～5月20日の試掘調査の結果、行った。調査区は南側区をA地点(約35m²)、北側区をB地点(約25m²)と設定し、全体で約60m²を調査した。A地点では表土下10cmで遺物が出土しはじめ、縄文時代晩期主体の文化層を第2層で確認した。旧石器時代の遺物としては第2層下面の細石刃、第3層の台形石器が出土したが、土器と共に伴しており、土層の状況が不安定な所もみられた。B地点においては第2層が削平されおり、縄文時代の遺物はA地点に比べ少量であった。また、表土と第3層下部で出土した台形石器は同一時期の所産であり、表土出土のものは本来第3層下部に由来するものであると予想される。

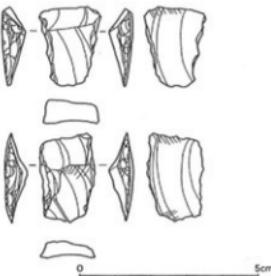
まとめ

表土からの採集が多かったが、第3層の台形石器についてそのほとんどが古いタイプの日ノ岳型であることが判明し、本遺跡の後期旧石器の特徴となっている。

〔調査担当：福田・高原〕(文責：高原)



堂崎遺跡位置図【大村】(1/25,000)



出土遺物(日ノ岳型台形石器)

㉙ いきりき 伊木力遺跡

所 在 地 西彼杵郡多良見町舟津郷

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 道路改良工事

調査面積 398m²

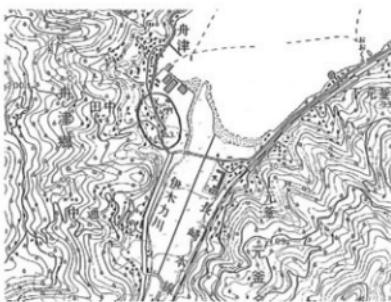
調査期間 平6. 8. 22～平6. 12. 7

処置 調査後工事

報 告 書 未刊行

立地

遺跡は多良見町の北西部に位置し、伊木力川が北流して大村湾に注ぐ河口西岸の低い丘陵と水田地に立地する。付近の海岸は埋め立てられ、また、周囲の丘陵はミカン畑として利用されている。昭和59年・60年に行われた調査では、縄文時代早期～晩期の土器・石器・骨角器と、縄文時代前期で日本最古のモモの実や丸木舟と思われる大形加工材が出土している。



伊木力遺跡位置図〔大村〕(1/25,000)

調査

今回の調査は工事に先立ち、平成5年に行った試掘調査に由来する。調査区は、伊木力川に程近い標高2～3mの水田地163m²をA地区、標高8m程の低い谷部のミカン畑235m²をB地区と設定し、調査を行った。

B地区では縄文時代後期から中世にかけての遺物が出土した。層位では第3～5層が遺物包含層となっている。第3層は中世の遺物包含層で、国産の土器・陶器、滑石製石鍋と共に伴して、中国製の青磁・白磁等の陶磁器が出土した。第4層は弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器を中心とする大量の遺物を包含していた。しかし砂質土のうえ、礫が多く混在するため、土器片がかなり細かく、且つ摩滅している。よって、この層は土石流等の災害で一挙に堆積してきた可能性が高い。第5層の遺物は第3～4層と比較して数量が少なく、縄文時代後期の土器を中心としている。

A地区は縄文時代前期を主体とした遺物が多く出土し、層位は9層に分けられる。第5層は曾畠式土器中心の層、第6～7層は轟B式土器中心の層である。第5～7層は礫を多く含んだ層で、遺物も細片が多いことから、洪水等による堆積層と考えられる。この遺跡の大きな特徴は、16基のドングリピットである。第8層を掘り込んだこのピットには、中身が取り出されたカシ類の皮で満たされていた。またピット内から轟B式土器が出土していることから、縄文時代前期前半の遺構であることが判明した。

まとめ

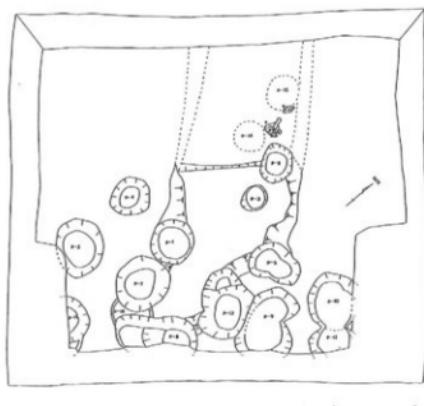
今回の調査で検出されたドングリピット群は標高0m前後の不安定な泥炭質粘土層に直径70～140cm、深さ25～70cm程度掘り込まれていた。さらに、内部の堅果類はほとんどがアカ抜きが不要のイチ

イガシであり、保存・除虫のためのピットと考えられる。また、これらは轟B式土器の時期のものであり、低湿地遺跡におけるドングリピットの成立年代がさらに測る資料として重要である。

【調査担当：宮崎・高原】（文責：高原）



調査区配置図



A地区 ドングリピット検出状況

⑩ 黒丸遺跡

所在地 大村市黒丸町

調査原因 道路改良工事

調査期間 平6. 1. 15～平7. 2. 3

報告書 未刊行

調査主体 長崎県教育委員会

調査面積 1,767m²

位置 調査後工事

立地

本遺跡は、扇状地である大村平野の北側を流れる郡川下流左岸に立地する。大村湾に接する扇状地の扇端であるため、古来から水田として利用される肥沃な土地である。昭和52～55年にかけての調査で縄文時代晩期の土器・土掘具・甕棺墓等が出土し、以来多量の遺物が確認されている。南隣には弥生時代の集落遺跡で、甕棺墓や鉄戈等を出土した富の原遺跡等が所在する。

調査

本遺跡の調査は平成5年から3ヵ年計画で行い、平成5年度に1次調査として2,766m²を調査した。今回の調査は前年度に引き続き、南からIII、IV、V区とグリットを設定し調査した。

遺物出土点数が最多であったのは、昨年の調査区に隣接するIII区である。III区ではグリット内を10m×13mのブロック1～11に分割して調査したが、全域でIV層中第III層から弥生時代中期と思われる城ノ越式土器を多く検出した。他に石鏃・磨製石斧・石庖丁等の石器や、漁労具の石錘・石剣等も出土した。また、III層中位から上位にかけて掘り込みは不明だが、壺棺を9基確認した。壺は頸部以上を欠き、その口の広さから小児用あるいは二次埋葬用と思われる。また、9基のうち1基は合わせ口壺棺であった。壺棺は全て広口壺であり、肩部の張ったつくりから弥生時代中期の様相を呈している。壺棺の周囲から長頸壺・小壺が出土しており、副葬品とみられる。

IV区・V区とも遺構は検出されず氾濫原の痕跡が残っており、わずかに縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺物収集に留まった。

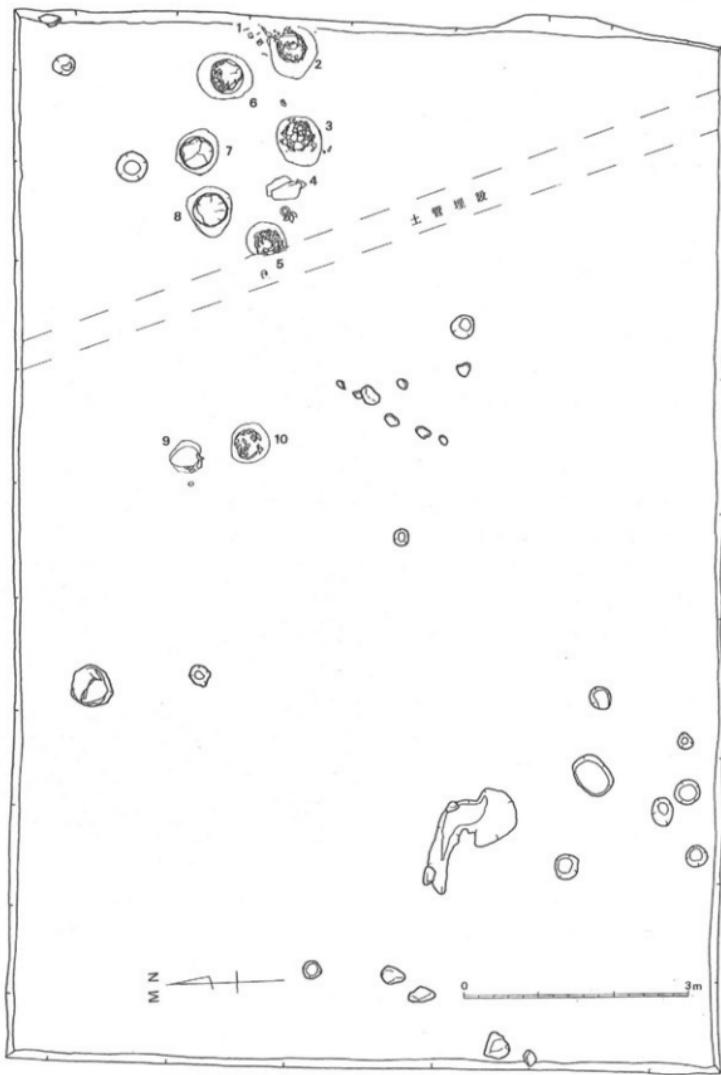
まとめ

本遺跡は、III区第III層を生活面としている。第III層は上・下に分かれ、下層に壺棺群、上層に流れ込みと思われる遺物包含層を確認した。壺棺群はさらに東に広がる様相であった。住居跡は発見されなかったことから、比較的高台である東側に集落の中心があると思われる。

【調査担当：田川・村川・古門・岡・松尾・高原】（文責：高原）



黒丸遺跡位置図〔武留路山〕(1/25,000)



壺棺出土状況(III-9区)

た い ば る じ ょ う り
⑩ 田井原 条里遺跡

所 在 地 謎早市仲沖町272 ほか

調査原因 農免農道整備事業

調査期間 平6. 12. 12～平6. 12. 20

報 告 書 未刊行

調査主体 長崎県教育委員会

調査面積 64m²

処 置 本調査

立 地

本遺跡は謎早平野の西部、標高3m前後の水田地帯にある。周囲は宅地化が急速にすすみ、かつて条里があったという面影は全く見られない。現在、当地には東西方向へ約1kmにおよぶ農道が敷設されているが、今回の調査はこの農道拡幅に伴うものである。

調 査

調査は拡幅される農道部分の北側沿い400mに、約25m間隔で2m×2mの試掘坑を計16か所設定し、遺跡の範囲確認を行った。条里に伴うと判断できる遺構はなかったが、調査の結果、農道の東半分200mから中・近世の遺物を多数得ることができた。

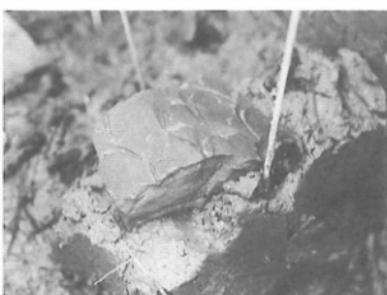
遺物は中・近世でも限定された時期のものが中心である。量的に多いのは瓦で、丸瓦や平瓦が多数を占める。軒丸瓦や表面に魚鱗状の文様をもつものもある。このほか、土師小皿・瓦質土器・唐津系陶器・明青花なども出土した。

ま と め

条里に係わる時期の遺構・遺物は全く確認できなかったが、調査区の東半分で中世～近世の良好な包含層を把握することができた。時期的なものからすると、田井原条里の東方にある沖城跡との関連が考えられる。沖城は西郷氏の支城で、天正15年（1587）に龍造寺氏が伊佐早へ入城したのちには龍造寺家晴の隠居場になったという。これは出土遺物の時期ともほぼ合致する。本調査が実施されれば沖城との関係がより明確になるものと期待される遺跡である。



田井原条里遺跡位置図【謎早】(1/25,000)



遺物出土状況

【調査担当：本田・松尾】(文責：本田)

㉒ 田井原 条里遺跡

所在地 謹早市幸町301-4ほか、仲沖名278ほか

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 都市計画道路建設

調査面積 68m²

調査期間 平7.2.20～平7.3.3

位置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

本遺跡は、諌早市街地の東端、本明川の右岸（南側）に広がる標高3m前後の水田地帯にある。昭和32年の諌早大水害の後に実施された大規模な耕地整理で、あたり一面平坦な水田が開けているが、以前は起伏の著しい地形であったらしい。昭和40年代前半頃の航空写真では当地の旧地形に加え、条里地割が看取れる。

調査

今回の調査は、水田地帯を南北に縦貫する都市計画道路の建設に伴うもので、古代条里の南東と推定される部分が対象地内にあるため、範囲確認調査を実施することとなった。

調査は、拡幅される道路の両側（東西）に、2m×2mの試掘坑を計17箇所設定し、北から番号を付して実施した。

その結果、都市計画道路と直交する農道以北の試掘坑では、遺構・遺物を伴わない青灰色潟土が発達し、以南では攪乱が深くまで及んでいたところと、青灰色潟土の下に砂礫層（基盤）

の発達したところが見られた。

条里遺跡であるから、古代～中世の遺構を期待したが、条里に伴うと判断できるものはなかった。

まとめ

この調査では、TP.E 4で土師器が出土し、TP.E 5・E 7で木杭列が確認されたが、田井原条里に関わる時期の遺構・遺物は全く確認できなかった。また、遺跡の範囲を特定することもできなかった。結果的に条里存在の確証を得られなかつたものの、今後新たに線的・面的な調査を行えば、条里の畔や水口などが見つかる可能性もあり、期待される。

【調査担当：本田・松尾】（文責：松尾）



田井原条里遺跡位置図〔諌早〕(1/25,000)



田井原条里遺跡遠景

⑬ 釜海中干渦遺跡

所 在 地 北高来郡高来町湯江黒崎名釜

調査原因 総合運動公園に伴う埋立工事

調査期間 平7. 2. 20～平7. 2. 22

報 告 書 未刊行

調査主体 高来町教育委員会

調査面積 28m²

處 置 調査後工事

立 地

遺跡は、多良山系から南西方向に、枝状に延びた丘陵の末端部、標高 0 m 地帯に位置する。周辺は、有明海特有の干渉地帯であり、現在は牡蠣の産地として知られているが、諫早湾干拓事業などにより周辺の環境も様変わりしている。

調 査

遺跡は、昭和58年の県の周知事業の際に、この地区において縄文晩期の土器片、打製石斧が表面採集され、周知化されていた。調査は、この地が総合運動公園として埋立工事を行うことによる。調査は、2 × 2 m のグリッドを東側から7ヶ所設定していく、東側からグリッド番号をA～Gとしていった。すべてのグリッドにおいて30～40cmで岩盤に達し、遺物包含層は確認できなかった。南側にも調査範囲を広げる予定であったが、渉地であり、調査できる状況ではなかったため、調査を終了した。

遺跡の立地から考えても、この地域は背後の丘陵が侵食された地域であり、表探資料等も丘陵上の遺物が流れ込んだ可能性が大きいものと考えられる。

[調査担当：福田] (文責：福田)



釜海中干渉遺跡位置図 [湯江] (1/25,000)



調査区域設定図

⑯ 城ノ尾原遺跡

所在地 南高来郡愛野町乙字城ノ尾原2254-2～2285 調査主体 愛野町教育委員会

調査原因 農業関連 調査面積 48m²

調査期間 平6.10.4～平6.10.12 处置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

城ノ尾原遺跡は、愛野町中心街から国道57号線を愛野展望台方向へ登りつめた、高台先端に立地する、縄文時代から弥生時代、中世の遺物散布地である。当該地は、全国的に有名な馬鈴薯の産地であり、畑地の8割近くは馬鈴薯畠で占めている。このあたりでは、馬鈴薯の品質改善のため主に森山町山間部からの客土により耕作土がつくられてきた。近年では後継者不足から耕作者が減少し、耕作者がいない畑地は町が管理し、コスモス畠として利用している。

調査

調査は、畠の区画整理を目的としたモデル事業に伴うものであり、対象地区の遺跡範囲内に2m×2mの試掘坑を12箇所設定し、順次発掘調査を実施した。

土層は、1層が耕作土(主に客土)、2層が赤褐色砂質土、3層が黄褐色小礫混砂質土を基本土層とし、以下に岩盤が露出する。2層は所により黒褐色の互層が観察され、火山灰堆積土層と推測された。

まとめ

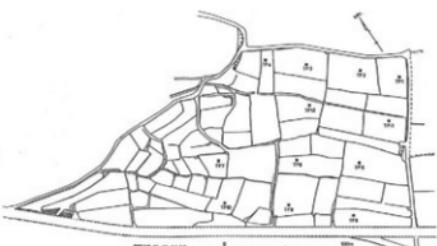
今回の調査では、畠の表面から客土が行われていない畠を中心に土器や黒曜石が採集され、遺物包含層の存在が期待されたが、遺物・遺構の出土は全く確認されなかった。

よって、遺跡に対する影響はないものとみて、工事の着手は可能であるとした。

[調査担当：寺田] (文責：松尾)



城ノ尾原遺跡位置図 [愛野] (1/25,000)



城ノ尾原遺跡調査区域図 (1/4,000)

③5 小原下遺跡

所 在 地 南高来郡有明町小原名字和田乙827番地

調査原因 宅地造成

調査期間 平6.5.30~平6.6.1

報 告 書 未刊行

調査主体 有明町教育委員会

調査面積 9 m²

處 置 調査後工事（盛土で回避）

立 地

遺跡は、島原半島北東部の有明海に突出した丘陵先端部の標高約20mに立地する、縄文時代後期から晩期にかけての遺物が散在する。現在は先端を国道251号線が通り、また、工場・住宅等の造成工事などで遺跡周辺の地形もかなり変化しつつある。

昭和41・42年と45年に発掘調査が実施されており、縄文時代後期から晩期にかけての土器・石器・炉状遺構等が確認されている。

今回の調査区は、遺跡最南端の丘陵傾斜地にあたる。

調 査

普賢岳災害被災住民の個人宅地造成に伴うものであり、全面を盛土でかさ上げし、その上に住宅・倉庫・車庫を建設予定であるため、試掘調査を実施することとした。

調査は、住宅部と車庫部に2m×2m、の試掘坑をそれぞれ1箇所ずつ、南東隅に1m×1mの試掘坑を1箇所設定し調査した。

まとめ

調査の結果、TP.1とTP.3に縄文時代後期から晩期の遺物包含層が確認されたが、遺構は検出されなかった。また、TP.2周辺では切土が行われており、遺物包含層はすでに消失していた。

これにより、造成工事のほぼ全面が盛土工事であり、住宅部分に掘削が伴うものの、遺物包含層に及ぼす影響はないと考えられる。また、倉庫・車庫部分については、盛土を約1mほど行うので地下へ掘削が及ぶことはないと考えられる。したがって、工事の着手は可能であるとした。



小原下遺跡位置図 [多比良・島原] (1/25,000)



小原下遺跡近景

[調査担当：寺田] (文責：松尾)

おおのばる
③6 大野原遺跡

所 在 地 南高来郡有明町大野名字南大野原戊

調査主体 有明町教育委員会

調査原因 会社建設に伴う調査

調査面積 24m²

調査期間 平6. 7. 25~7. 29

処 置 調査後工事着手

報 告 書 未刊行

立 地

雲仙山麓東側は有明海に向かってゆるく傾斜しているが、遺跡は役場や市民センターを中心とし標高20m~25mの広い範囲に位置する。町の行政の中心にあたるため、昨今種々の開発が行われ、その度に調査がくり返されている。

調 査

大野原遺跡の全体は23万m²にも及び過去数回の調査が実施されてきた。またこのあたりはゴボウの特産地としても知られ、機械化された作業のため土が深耕され、遺物も数多く表面に見られる。本地点から約100m南西に離れた町営プールでは、建設に先立って調査が実施され、8世紀頃を中心とする遺構や遺物が多量に出土し、ヘラ描き文字の土師器も出土しており、古代における重要な地点と考えられている。

また、市民センター周辺においても弥生時代の墓地などが確認されていて、極めて大きな集落が営まれていたことが考えられる。

今回の調査では、開発予定地内に2m×2mの試掘坑を6箇所設定した。調査の結果、道路に面した試掘坑では、全体が搅乱を受けていて遺物は出土しなかったが、他の試掘坑ではほぼ共通した層位が観察される。表土層はゴボウ収穫期のトレッチャの影響で地表下60~80cmの搅乱を受け、その下層には良好な縄文時代晩期の遺物が含まれている。内容は条痕文土器や精製土器、石斧、黒曜石片などである。また、搅乱層中からは土師器片が混じる。この箇所では弥生土器の出土は見られない。

まとめ

大野原遺跡は、これまで弥生時代の遺跡の観念が強かったが、今回の調査で縄文時代晩期まで遡ることも確認された。さらに、これまでゴボウの作付けにより遺物包含層はほぼ全滅していると思われたが、少なくとも地表下80cm以下は残っていることが裏付けされた。

この遺跡は今後も開発が著しいと考えられるので詳細な範囲確認調査を行い、対応策が急務である。

【調査担当：安楽】（文責：安楽）



大野原遺跡位置図【多比良】(1/25,000)

③ 沖田遺跡

所在地 島原市前浜町沖田

調査主体 長崎県教育委員会

調査原因 中尾川中小河川改修事業

調査面積 180m²

調査期間 平6. 10. 12～平7. 3. 3

処置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

遺跡は長崎県の南東部を占める島原半島の東海岸に位置している。中尾川の下流域の標高4～5mの平地で水田と畑地になっている。

雲仙普賢岳の溶岩ドーム崩落により土砂が堆積し、平成5年4月以降の降雨で土石流が発生し、中尾川でも下流を中心に被害を受けた。このため中尾川の拡幅と大型の堤防建設が計画され、工事に先立って試掘調査を実施した。

調査

調査は、基本的には30mごとに一個所3m×3mの試掘坑を設定して行なった。それぞれの試掘坑は南北からA・B・C・D列とし、海岸から1・2・3…と数字を付けた。

土層の状況は、この地域が過去において何度かの洪水、あるいは土石流による被害の痕跡を示している。島13試掘坑の場合、耕作土の上が約30cmの土石流による砂礫に覆われており、その下が水田の層となっている。水田の耕作土は20cmほどで、その下に10cm～15cmの黄褐色の粘質土がある。その下が洪水あるいは土石流のあとと思われる砂礫層となっている。その下層に黒褐色の粘質土があり、かつての耕作土と見られる。B3・D5試掘坑は下層に砂と砂礫の層が、自然の堆積を示す状況で認められ、海岸部分であったと思われる。

調査では、ほんのわずかの土器片が出土したにすぎない。小破片のため時代・器種などは不明である。住居址などは確認されなかった。

まとめ

中尾川の上・中流域に平の山B遺跡や釣原遺跡・道田遺跡などがあり、これらの遺跡から、洪水・土石流などによって遺物が下流に運ばれた可能性も考えられる。



沖田遺跡位置図【島原】(1/25,000)

〔調査担当：藤田〕（文責：藤田）

沖田遺跡調査地域

ふるこの
⑩ 古枯野遺跡

所在地 南高来郡布津町坂下字古枯野225番

調査主体 布津町教育委員会

調査原因 園場整備管理道路敷設

調査面積 103m²

調査期間 平6.10.3～平6.10.4

処置 調査後工事

報告書 未刊行

立地

古枯野遺跡は、布津町の南東に位置し、海岸に向かってなだらかに傾斜する標高100～130mの舌状台地に立地する。海岸からの距離はおよそ2kmで、北西部は有家町との町境をなす。周囲は大豆、たばこ畑であり、東に有明海がひろがる。

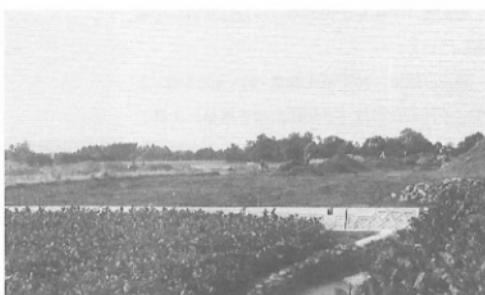
調査

平成5年8月2日～13日にかけて遺跡の範囲確認調査を実施し、柱穴や土坑などの構造と縄文晩期土器・弥生後期土器・石器などの遺物を発掘した。平成6年5月16日、7月28日に本年度分の園場整備事業の対応を町教委、町事業課、県文化課で協議した。その結果、道路部分（幅約2.5m、長さ約25m）のみ発掘調査をおこなうこととなった。

調査区にあたる路線部分の現状は畑と畑が接するところで段差を



古枯野遺跡位置図〔雲仙〕(1/25,000)



古枯野遺跡遠景

もち、傾斜面は石垣によって整えられていた。調査は、まず重機でこの石垣とともに表土を掘削したところ表土下50～60cmから本遺跡の地山である明黄色粘質土があらわれた。調査区全体がこのような状況であったため、調査区内では文化層がすでに掘削をうけて消滅したものと判断した。

〔調査担当：村川・古門〕(文責：古門)

にしおにづか
⑩ 西鬼塚石棺群

所 在 地 南高来郡有家町蒲河名

調査主体 有家町教育委員会

調査原因 農業関連

調査面積 168 m²

調査期間 平6. 10. 25 ~ 平6. 11. 2

処置 移築復原

報 告 書 刊行予定

立地

本遺跡がある有家町は、島原半島の中心にある雲仙岳のほぼ南麓に位置し、火山灰によって形成された扇状地上に立地している。遺跡は、標高60~66mの山麓中腹に位置する。また、海にも比較的近く、遺跡の西側を蒲河川が開析谷をつくっている。

調査

昭和49年3月の古田正隆氏の調査を契機として、1次調査（平成4年5月6日～6月8日）、2次調査（平成6年10月25日～11月2日）を実施している。

調査の結果、縄文時代晚期（約2,400年前）と推定される支石墓（下部構造は土坑墓）1基、箱式石棺墓5基、支石墓様造構1基等が検出されている。

出土遺構は、石棺のそばから丹塗磨研壺、甕（いずれも原山式）、十字形石器、黒曜石製石鐵、磨製石斧、安山岩製スクレイパー等がある。

まとめ

本遺跡調査の意義としては、県内で12番目の支石墓遺跡として、その知見を増すとともに、これまで島原半島の支石墓が、北有馬町の原山支石墓群が知られるにとどまり、その標高も250m程の高燥域にしかその存在が知られていなかったのに対して、比較的低い場所に発見されたということだろうなお、本遺跡の東側70m程の集落内に笠塙現様として祀られている笠石（長さ1.2m、幅0.7m、厚さ0.5m）の比較的大きな石が、遺跡から運ばれたとの地元の方の話があり、これが支石墓の上石であった可能性がある。検出された遺構は現在、町立運動公園内に移築復原されている。



西鬼塚石棺群位置図 [雲仙・須川] (1/25,000)

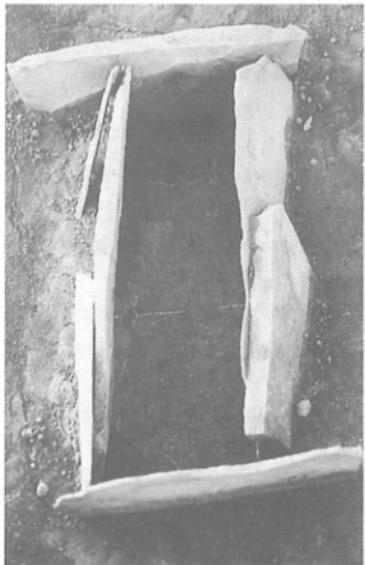


遺跡遠景(西側から撮影)▽印のところ

〔調査担当：村川〕 (文責：村川)



支石墓（支石のみ）手前、及び石棺



石棺の様子



笠権現様（支石墓上石）

④〇 かまが
蒲河遺跡

所 在 地 南高来郡有家町小川地先

調査主体 有家町教育委員会

調査原因 町立運動公園（海水浴場）建設

調査面積 180 m²

調査期間 平. 6. 8. 29 ~ 平. 6. 9. 22

処 置 一部本調査

報 告 書 未刊行

立 地

島原半島の南部に位置し、天草の島々を望む東の蒲河川と西の有家川に挟まれた海岸一帯が蒲河遺跡である。当地は拳大の礫が散らばる砾海岸で、満潮時は海中に沈み、干潮のときに現れてくる海中干潟遺跡である。付近の遺跡で代表的なものに、昭和55年の調査で、黒色磨研土器・組織痕土器など縄文時代晩期の遺物を出土した海中干潟遺跡の堂崎遺跡がある。



蒲河遺跡位置図 [須川] (1/25,000)

また、遺跡全体から、堂崎遺跡出土のものと

同じ、縄文後期から晩期にかけての砾器を多数表面採集することができる。

調 査

本遺跡は、昭和58年度に実施された分布調査により周知された遺跡である。この度、町立総合運動公園の建設にあたり、遺跡の範囲確認調査を実施することとなった。

調査は、工事予定地内を25m×25mのメッシュに区切り、ほぼ50m毎に3m×3mの試掘坑を計20箇所設定した。

調査の結果、深い所でも70~80cm、浅い所では10cm程度掘り下げたところで岩盤に到達した。また調査区全体に砾器が散在していたため、かなりの範囲にわたって遺物包含層を検出するものと思われたが、実際の遺物包含層は、調査区域に流れ込む小川の付近に限定されることが判明した。

なお、遺物包含層を検出した部分はちょうど防波堤の一部にかかるため、今後の遺跡の取り扱いについて、関係機関との協議が必要であるとの指導をしている。

[調査担当：高野・村川・福田・松尾] (文責：松尾)

④ 湾頭遺跡

所在地 南高来郡小浜町山畠字仲の間

調査主体 小浜町教育委員会

調査原因 園場整備に伴う道路拡張と水路整備

調査面積 274m²

調査期間 平6.7.11～平6.8.5

処置 調査後工事

報告書 1995. 長崎県小浜町文化財調査報告書第2集

立地

小浜町は、普賢岳を擁する島原半島の西側中央部に位置しており、西に横湾を望みその向こうに長崎半島を眺望する。

湾頭遺跡は、小浜町南部の南串山町にほど近い台地上に立地している。

付近には、昭和58年度に調査された繩文時代晩期～中世にかけての大屋敷遺跡がある。

調査

昭和57年に実施された分布調査によって、再確認された遺跡である。

このほど、山畠地区において土地改良事業が実施される計画となり、平成5年度に範囲確認調査を行った。このときに中世のものと思われる柱穴を1基検出したところから、本調査を実施することになった。

今回の調査は、水路を挟んで西側をA区、東側をB区として、5m毎に西から東へA～G、南から北へ0～3としてグリッドを設定し、調査した。

まとめ

調査の結果、中世から近世にかけての掘立柱建物跡を2棟検出した。しかし、畠地の開墾などによって、遺物包含層が搅乱を受けているため、龍泉窯系の鍋蓮弁文の青磁碗片、同じく蓮華文の青磁碗片、明の染付片をはじめ、須恵質土器、土師質土器、黒曜石等を少量出土した。

また、工事に際しては遺構を保護するため盛土をしてかわすようお願いした。

【調査担当：田川・高野・村川・松尾】（文責：松尾）



湾頭遺跡位置図〔肥前小浜〕(1/25,000)



湾頭遺跡調査区域図

④2 ひばる
日原遺跡

所在 地 南高来郡南串山町尾登名日原

調査原因 農業関連

調査期間 平6.6.20～平6.6.24

報告 書 未刊行

調査主体 南串山町教育委員会

調査面積 22m²

処置 調査後工事

立地

日原遺跡は、加津佐町との境に位置する彦山の裾野から北西に延びた、標高約120mの台地上に立地している。周囲には黒曜石剝片が多数散布しており、縄文時代の遺跡として周知されている。

調査

調査は、畑地かんがい排水整備工事に伴う配水管の埋設工事であり、幅50cm、深さ50～70cmの掘削を伴う工事である。

平成5年度に引き続き、平成6年度施工路線上の掘削幅が広がる給水ポイント20箇所に、1m×1mの試掘坑を基本として設定して、発掘調査を行った。

層位は、基本的には4層に大別できる。

第1層は、暗褐色の耕作土でその下に整地層が観察され、開墾時の堆積層と考えられる。

第2層は暗褐色粘質土層、第3層は黄褐色粘質土層、第4層は赤橙色から黄色の風化土層(地山)で、調査区により多少異なる。

合計20箇所の試掘坑のうち、遺物の出土は1か所にとどまり、その他の試掘坑では全く出土していない。

まとめ

ほとんどの試掘坑で地表下1m以内で風化土層(地山)に達し、遺構・遺物は全く検出されていない。遺物の出土した試掘坑では、第2層で、弥生土器片・黒曜石片がわずかに出土したが、層の上半は削平を受けており、遺物包含層の残存は良好とはいえない。

【調査担当：寺田】(文責：塙塙)



日原遺跡位置図【肥前小浜】(1/25,000)



日原遺跡全景

くにさき
④3 国崎遺跡

所在地 南高来郡南串山町丙1番地外

調査主体 南串山町教育委員会

調査原因 公園整備

調査面積 96m²

調査期間 平6.12.5～平6.12.21

処置 調査後工事

報告書 平成7年度刊行予定

立地

国崎半島は周囲約3kmの陸繋島で橘湾を一望し、長崎半島、天草諸島をも視野にいれることができ。気候は温暖で、アコウ、ハマユウなどの亜熱帯植物が自生し、長崎半島自然公園の一部となっている。

調査

調査は本年度の公園整備事業対象地を連続した4つの調査区に分け、南からA、B、C、D地区として実施した。1つの調査区は6m×4

mとし、全体では6m×16mの矩形となるように設定した。調査前の地形は海岸に向かって、かなりの勾配をもって傾斜する斜面で、以前は畑として利用されていた。基本的な層序は第1、2層が表土ならびに耕作土。第3層（暗褐色硬質砂質土層）が古代から中世の遺物包含層。第4層（黄灰色砂層）は縄文晚期前半を中心とした遺物包含層。第5層、第6層は無遺物層である。第3層は拳大の礫を多く含み礫中に遺物が含まれていた。この第3層と第4層の間は不整合面をなすことから、第3層の堆積は急流あるいは混濁流などによる第4層の削り込みに始まると考える。第4層以下は漸移層である。第6層は黒色砂層である。砂地で遺構が残りにくいため、明確な遺構は出土しなかったが、D地区の西側に貝層が出土した。貝層の中心はD地区よりさらに北西奥にあり、貝塚として残っている可能性もある。C地区の第4層を除去して第6層にはいったところ（第5層は間層）で、小児骨が出土した。獸骨は、イノシシ・シカ・イヌ・クジラ・ウミガメ・マダイなどが確認された。その他の出土遺物として多量の縄文晚期前半の土器や結晶片岩製の石錘、経石製石製品、安山岩製の打製石斧、磨石などが出土した。

まとめ

今回の調査により縄文晚期前半のほぼ単純な遺物包含層（4層）を確認した。さらに獸骨を中心とした自然遺物の調査の結果、縄文晚期における狩猟・漁労・採集活動の一端がうかがわれた。しかし、古代・中世の遺物については、今回の調査でも、遺構や遺物の性格など具体的な事実を明らかにすることはできず、今後の課題として残った。

【調査担当：安楽・古門・寺田】（文責：古門）



国崎遺跡位置図〔肥前小浜〕(1/25,000)

長崎県文化財調査報告書 第124集

長崎県埋蔵文化財調査年報III

平成8年3月31日

発行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印刷 株式会社 昭和堂印刷

長崎市栄町6-23 田中屋ビル